

(司会) 皆さん、こんにちは。ただいまから、令和元年度東京都自立支援協議会セミナー、第24回東京都障害者福祉交流セミナーを開会いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、東京都心身障害者福祉センター、地域支援課長の森下でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、大変多くの皆様にご参加いただき、誠にありがとうございます。

お手元の冊子の3ページをご覧ください。本日のプログラムを記載してございます。

本日のセミナーは、第1部に基調講演を、第2部にパネルディスカッションを行います。途中、休憩時間を予定しておりますが、トイレ等の案内が必要な場合や気分がすぐれない場合など、ご用がありましたら遠慮なく黄色い名札をつけたスタッフにお声かけください。

それでは、開会に当たり、東京都心身障害者福祉センター所長の粉川からご挨拶申し上げます。

## 開会挨拶

### 粉川 貴司（東京都心身障害者福祉センター所長）

(粉川) 皆さん、こんにちは。東京都心身障害者福祉センター所長の粉川と申します。

本日は、東京都自立支援協議会セミナーにご参加をいただき、誠にありがとうございます。

東京都では、障害のある人もない人も、社会の一員としてお互いに尊重し、支え合いながら地域の中で、共に生活する社会を目指し、障害者施策を推進しております。

このような中、東京都自立支援協議会は、第6期のテーマを、都と地域の協議会活動における情報共有を促進し、当事者と共に東京の協議会活動を活性化させるといたしました。そして今年度は、協議事項としまして、当事者の声を反映させた協議会活動を考えるとして、活動を行っており、本日のセミナーは、当事者の率直な声を聞きたい、届けたいと考え、企画をいたしました。

本日のセミナーのテーマは、障害のある人とつくる「みんなが暮らしやすい社会」～「わたしたち」の社会を豊かにするために～でございます。

第1部では、多様性を生きるわたしたち～障害者のリアルに迫りながら～をテーマに、植草学園大学客員教授、一般社団法人スローコミュニケーション代表、毎日新聞論説委員の野澤和弘さんに基調講演をいただきます。

第2部は、障害のある人のホンネ「暮らしやすい社会」とは、～いろいろな視点から社会を見つめてみると～をテーマに、パネルディスカッションを行います。

初めに、障害当事者の方々から日々の暮らしの中で感じていることを率直にお話をいただきます。その後、休憩を挟み、後半は武蔵野大学人間科学部人間科学科教授で、東京都自立支援協議会の会長でもあります、岩本操さんにコーディネーターをお願いし、ディスカッションをしていただきます。

限られた時間ではございますが、ご参加いただいた皆様が、障害のある人もない人も、誰もが暮らしやすい豊かな社会について考える機会となり、日々の暮らしの中で役立つセミナーとなりますことを願い、開会の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(司会) 粉川所長、ありがとうございました。

それでは、第1部、基調講演です。野澤和弘さん、ご登壇ください。

それでは、本日の講師を紹介いたします。植草学園大学客員教授、一般社団法人スローコミュニケーション代表、毎日新聞論説委員、野澤和弘さんです。

本日は、多様性を生きるわたしたち～障害者のリアルに迫りながら～と題し、基調講演を賜ります。

それでは、野澤和弘さん、よろしくお願いいたします。

## 基調講演

### 「多様性を生きるわたしたち～障害者のリアルに迫りながら～」

野澤 和弘(植草学園大学客員教授、一般社団法人スローコミュニケーション代表、毎日新聞論説委員)

(野澤) こんにちは。ただいまご紹介いただきました野澤です。よろしくお願いたします。

昨年の10月末で36年勤めた毎日新聞という会社を辞めまして、今、いろんな立場でフリーでやっております。

私自身は、重い知的な障害のある子供の父親でもあります。彼と30年以上一緒に生きてきて、この国がバブルになって、それがはじけて、更に今の低成長の時代、こんなところと一緒に生きてきました。

今日いただいたお題は、「多様性を生きるわたしたち」ということなんですけれども、この多様性というのは、もう不可避ですよ。むしろこれがないために、今、日本はいろんな問題に直面していると言っても良いんじゃないかなというふうに思います。

平成の30年は振り返ってみると、大企業の不祥事の時代ですよ。中国に日本は抜かれて、GDPがですね、第3位になったといいますけれども、もう、もはや今は抜かれたどころか、中国の3分の1しかGDPないんです、日本というのは。最近はまだアジア諸国のグローバルサプライチェーンで、もう日本の経済なんて、もう置いてきぼりをくいような感じです。その大きな原因は、やっぱり多様性をこの国が避け続けてきたことだと私は思います。

これは障害者のことを今日お話しますけれども、障害者だけではなくて、この国の社会全体、そして経済も含めて今後の我が国、あるいは世界の人々とどんなふうにこれからの時代を生きていくのかということ、私たちは考えていかなければいけないと思うのです。その障害のある方たちの問題というのは、本当にこれからは主流の1番最先端に考えていかなければいけないことだというふうに思っております。

前のほうにスライドといいますか、パワーポイントを用意したので、これを見ながらお話を聞いていただければというふうに思います。

これはもう端的に日本が遅れてきたということがわかんと思いますけれども、障害者の差別禁止法を1番最初につくったのはアメリカで1990年です。これ以降、世界の先進国は軒並み似たような法律をつくってきたのですね。日本だけです、ずっとほおかぶりしてきたのは。ようやくそれが2006年に千葉県が、国につくらないのであれば、法律はつくれませんけれども、地方自治体は条例というのをつくれますので、それをつくろうではないかというので、初めてつくった。これがもう各都道府県に波及してきてまして、東京都ももちろんできておりますけれども、今はもう条例を持ってない県のほうが少ないぐらいになってきました。市町村でもこの条例をつくるようなところが出てきました。

ようやく2013年に国が差別解消法をつくり、国連の権利条約を批准した。ここまできているわけですね。

この差別解消法は、それでも障害者の間ではもうよく知られています。もちろん知られておりますけれども、一般の人はまだ余り知らない方のほうが多いぐらいなんですね。これは障害のある方の差別をなくしていく法律ですけれども、実は、ここにいろいろなヒントが含まれているのですね。これを、この法律の可能性だとか、面白さをもっともっと我々、社会の側に伝えていきたいなというふうに思っているのです。

ちょっとやってみますと、差別には二通りありまして、この法律上。差別的取扱いの禁止ということと、あとは合理的配慮を守らなければいけませんよということが2つ、定められております。

差別的取扱いというのは何かというと、これは至ってシンプルで、障害を理由に、一般の人よ

り区別して不利な扱いをさせてしまうということです。

例えば今日のこのフォーラムですね、こんなことあり得ませんけれども、障害者は入ってはいけませんと、入るの禁止と、これが差別的な取扱いですね。合理的配慮は何かというと、どんな障害の方もどうぞ来てくださいと言っても、例えば車椅子の方、エレベーターがなかったり段差がそのままだったら、なかなかここまで来られないですよ。なので、そういう場合には、この物理的なバリアをなくす配慮をしてくださいと。これが合理的配慮です。

例えば耳の不自由な方、もし目の前にここにいらっしやったとしても、この手話通訳さんや、要約筆記の方がなければ、私が一生懸命しゃべったってなかなか伝わらないですよ。この場合には、こういう情報保障をしてくださいと。これが合理的配慮ということなのですね。これをしない場合にも、差別に当たりますよというのが、この法律の1番核心部分です。なので、この法律は、この合理的配慮、これをどうやって我々社会に浸透させていくのかということを考えていると思うのです。

ただ、企業とか、役所とか、団体、一般の社会の側からすると、障害者の言うとおりに全てを義務にされたのでは、これはなかなか大変な事態もあります。なので、過度な負担にならない範囲で義務にしますよということです。ただ、過度な負担かなという場合にも、義務にならない場合であっても、何もなくて良いということではなくて、建設的な対話をしてくださいということなのです。これはとても大事です。すぐに100%の解決にはなくても、何かできることはありますよね。それを障害のある方と前向きに話し合ってください、対話をしてください。その中からできるところを見つけていきましょうということなのですね。

私にもこんなことがありました。私はいろんな大学で教壇に立ったりしますけれども、千葉県にある障害児教育の先生になりたいという学生たちが集まってくる大学で、もう10年以上前から1コマ持っています。3年前ぐらいだったんですかね、行って第1回目の授業をやりました。100人ぐらいの大教室で大勢集まっちゃうんですけども、そこで授業をして帰ってきたら、教務課から電話がかかってきて、今、先生の授業を聞いた男子学生がやってきて、授業がよくわからないと訴えているというのです。

私、ええっどういふことですかと聞いたら、野澤先生は合理的配慮を知らないんじゃないかと言っていると言います。これ、私にとってすごいピンチなのです。今日みたいに、皆さん合理的配慮こうですよ、守りましょうと言っている、この私が、自分の授業で、学生から合理的配慮知らないんじゃないかと言われているわけです。

ちょっとムッとしまして、これどういふことですかと言ったら、実は耳が全く聞こえない方だったんですね。その方はこうやって手話を使ってコミュニケーションします。そのほかに、しゃべっている相手の口の動きを読み取ることができるということです。その学生が何と言ったのかというと、野澤先生は早口でもごもごしゃべるものだから、唇が読み取りにくいと。来週からもっとゆっくりと大きな口を開けて、ずっと真正面を向いて授業をするように言ってくれと。これは仕様がないですね、これね。わかりましたと私言いました。

もう1つ彼が訴えている。何かと言ったら、どうもこのパワーポイントを使って授業をやっているんだけど、パワーポイントに書いてないことまで勝手にべらべらしゃべっているみたいで困ると。あらかじめしゃべることは全部パワーポイントに書くように言ってくれと言っているのです。これはちょっと大変だろうなと思いつつながら、建設的な対応、わかりましたと。彼とよく話し合っ、私も努力しようと言いました。

それから一週間、大変な思いをしながら、資料を用意して大学に行きました。そうしたら、彼の担任の先生が待っていてくれて、学部長まで飛んできて、100人の学生が見守る中で、大人3人がどうしようと、こうやっているわけですね。大学側も全く、本当は全部、手話通訳さん用意すれば良いんですよ、大学が。ただ、彼1人のために、全部の授業に用意するというのはなかなか大変です、これ。だからできない。でも、大学側もいろいろなことをやろうとしていました。

彼は1番前に座ってしまっていて、その隣の要約筆記のサポートする学生が座っているんですね。その方が、その学生が実はアスペルガー症候群だったのですけれども、彼はこういうIT機器が得意なんです。私を呼ぶわけですから、先生来ててくださいと。彼はもっと大きいアイポッドってありますよね。あれを持っていて、このUDトークというアプリケーションを起動させます。先生、画面に向かってしゃべってください。私がしゃべったら、何と私がしゃべっている声が文字になって出てくるんですね。おお、こんなものがあるのかと、じゃあこれ使おうと。ただ、マイクを使うと声がどうも反射してしまって、うまく文字変換できないので、マイクは使わないでくれと言うんですよ。100人の大教室でマイクを使わない授業がどうなるかということですよ。後ろのほうで女の子がはいと手をあげて、何かといたら、すみません、私難聴で補聴器つけているんですと。マイクを使ってくれなきゃ困りますと言うんですね。同じ聴覚障害なのに、利害が相反しちゃうわけですね。

どうしようと思ったら、実は私のこのスマホにもこれがダウンロードされました。彼が貸してくださいと。同期化すれば良いんですよと言って、この彼のアイポッドにくっつけてかちやっと同期化する。私が教壇の上でこうやってしゃべると、私の生の声がここに反応して、彼の手元の画面に出てくる。これによって、私の授業が辛うじて、この合理的配慮が何とか不完全でありますけれども、できるようになったということですね。

こういうふうには、何かできることがあるだろうというふうには考えていると、今意外にいろいろなことが出てくるんですね。割とこれが良い結果をもたらすんです。合理的配慮というのは、もちろん障害者のための配慮ですけれども、障害者は生きにくい、暮らしにくい、社会に参加しにくいというのが非常に凝縮して、それをわかりやすくあらわしてくれている方たちという言い方もできます。

つまり、その周辺には、障害者ではないけれども、同じような生きにくさを抱えた人たちがいっぱいいるのですよ。障害のある方に合理的配慮をすると、その周辺の方にも良い影響が広がっていくことが結構多いのです。

実はこれもそうなんです。これを開発したのは、東京練馬に住んでいる〇〇さんというミュージシャンなんですけれども、いち早くこれを取り上げたのは、京王プラザホテルとされているのです。今、都内のホテルなんか結構使っているらしいのです。これは何かというと、実は、声が文字に変換するだけではなくて、その変換された文字が瞬時に15カ国語に翻訳できるのです。今は外国からの観光客すごい多いですよ。中国語だけでも3種類ぐらい入っています。これを使うといういろいろな方に優しいコミュニケーションが保障できる。こういうことなんです。

私は、区だとか県だとか市に行こうという話をする時、これをお勧めします。だって、どの国もどの市にも聴覚障害の方はいっぱい住んでらっしゃいますよ。彼らが何か役所に用事があって行くのは、障害福祉関係だけではないです。下水道かもしれないし、住民票かもしれないし、教育委員会かもしれないですよ。全ての課に、全部こういう手話通訳さんや、要約筆記ができる方を配置しなさいと言っても、なかなかこれ大変ですよ。誰かのスマホに、これ無料バージョンありますからね。インストールしてあれば、何かの時に使えますよね。

こんなふうには、非常にこの合理的配慮というのは、いろいろ可能性のあるものを秘めています。

例えばいろいろな分野で今議論が進んでおりますけれども、例えば雇用の場ですよ。今、雇用の場では、知的障害とか、精神障害の雇用率というのは伸びているのです。というのは今、都内のハローワークに行っても、身体障害の方の求職者票というのはもう余りないと言われているんですね。つまり、企業が雇用率を達成するために、身体の人たちを一生懸命雇ったからですね。なので、企業からすると、もう知的障害、精神障害を雇わないと、雇用率が達成できないという企業がいっぱいあります。

伸びているのはいいんですけれども、意外に定着率がよくないのです。企業の側は、やっぱり知的や精神の方は難しいよねと、こんなことを言うのですけれども、私は、それは言うてはい

けないと。それはあなたたちに合理的な配慮が足りないから彼らが定着できないだけであって、障害者のせいにはいけないよと、私は言いますし、そう思っています。

厚労省の検討会で、例えばこの雇用の場における合理的配慮なんだろうと、随分前ですけれども、みんなで話し合ったことがありました。これも知的障害や精神障害の方を念頭においてやっているんですね。つまり、作業手順をわかりやすいように大きな字やイラストや写真を使って説明したものを壁に貼るとか、あるいは感覚過敏のある発達障害の人がいる場合があります。情報が過剰にインプットして、混乱して使えないようにパーテーションで仕切りをつくってくださいとか、いろんなこういう配慮をすると、彼らも作業の能力が伸びて定着もしやすくなるというようなことです。

割とこれは教育だとか、福祉の場ではよく導入されたりしていますけれども、企業の場合でも、こういうのを使ってくださいということなんですね。

実際、でも企業というのは面白くて、いろいろな障害者の雇用に熱心な企業を訪ねてみると、独自にいろいろな合理的配慮をやったりしております。ちょっとお見せしたいと思うんです。

これは尼崎にあるJR西日本の特例子会社なのですけれども、ここに行ったら、いっぱいいろいろな障害者がいましたけれども、例えばこんなものを導入してしまして、これ何かというと、机の右下の穴のところねじを差し込んで、ピュウッと回すと、机が高くなったり低くなったり横に広がったりするのです。これは障害者の体の大きさや、動きの機能に応じて机を変えちゃうことができるというのです。電動車椅子の方は、ある程度幅があったほうがスムーズに出入りできますし、座位の低い方の場合には、こんなところにあるとなかなか仕事できませんので、机のほうを変えると言うのです。これ、さっき言った、周辺の人にも良い影響が広がる、例えばこれですよ。

今、皆さんが座っている前の机見てください。みんな同じ高さ、同じ幅ですよ。皆さんの体の大きさというのはそれぞれ違いますよね。今日は2時間ぐらい、3時間ぐらいですから良いですけれども、毎日9時、5時、あるいは残業を含めて長時間労働する、そのオフィスが、もし自分に合わない机や椅子だったとすると、自分の体を無理するのです。だから肩が凝ったり、腰を痛めたりするわけです。でも今、この机の高さが違うなんて余りないですよ、オフィスに行っても。本当は、こうやって自分の体に合った机にしたほうが絶対良いはずなのです。

なので、こういう考え方が浸透していくと、多分いろいろなオフィスでこういう工夫が始まってくるのではないかなと思います。

これもそうですね。目の不自由な方がいらっしゃるかもしれませんが、これはカーペットを写しています。ちょっと高いカーペットらしいんですけども、足腰に負荷のかからない、車椅子の方や足の不自由な方が移動しやすいカーペットと言われているのです。これも最近では中高年の、高齢者も働くことが多くなってきました。これからも多分多くなると思います。ちょっとしたことでも長時間働くオフィスが、足腰にちょっと負荷のかかる場所か、そうじゃないところでは随分違うと思いますね。

これは大きな字で、紙のみとか書いたごみ箱なんですけれども、これもそうですね。弱視の方とか、知的な障害の方のためなのですからね。

ここは青森県にある精密機械を加工する工場の写真です。ここにはいろいろな知的障害、発達障害、精神障害の方いっぱい雇われております。これは「大声を出さないで賞」と書いてありますけれども、何かうまく集中してやれると、シールを1つ貼ると。そうすると、例えば自閉症の方とかは視覚優位の情報の取り方するというようなことを言われますので、話し言葉で褒められたり何かするよりも、こうやって見通しをつけて、目で見てわかるような達成感をやったほうが、モチベーションが高まるなんていうことを言われた。これは地元の特別支援学校の先生たちと話し合う中で、こういうことを取り入れたらなんかしていると言うんです。

この方は、1人だけ離れて別室で作業をしている方でありました。耳にオレンジ色の耳栓が入

っています。実はこの方が音に対する感覚過敏のある方で、小さな音でもものすごく苦痛を感じると言うのですね。なので、普通のオフィスではざわざわ、ざわざわしているので集中できない。仕事もできないし、会社にも行けなくなっちゃう。こういう静かな環境をつくってあげると、彼は非常に作業の効率が良くなって定着もできるようになると言うのですね。

つまり、オフィスの環境に障害のある方が合わせるのではなくて、障害者の特性に働きやすい環境を合わせてくる、こういうイメージですよ。

これは今の働き方改革にもつながってくるのです。割と雇用の場面というのは、障害者が先頭に立っているいろいろな新しい制度とか、ものを切り開いてきた。例えばトライアル雇用など、今余りやられなくなりましたけれども、あれを障害者が対象に始まって、それが一般の人には、若者に広がっていったりとか、あるいは特例子会社みたいなものが、今、中間的な雇用みたいなことが少し模索されていたりする。

これからテレワークなんかも多分一般の人には広がっていくと思うのですけれども、私思いませんね。何で毎日満員電車、同じ時間帯の満員電車に乗って、同じオフィスに行って、そこで働かなければいけないのかなと思います。それで、私余り会社に行かなくなってしまったのですけれども。

今、こういうパソコンとかスマホとかあるので、そんなに何が何でもオフィスに行って仕事をしなくても良いわけですね。ただ、会社の労務管理が楽だから、そうやっているわけで、1人1人の働きやすい環境で、働きやすい時間帯に仕事をすれば良いじゃないかという考えが多分広まっていくと、障害者だけではなくて、一般の人にも良いものが広まっていくのではないかなと、そんなことを考えております。

例えば教育でもそうなんです。これは乙武さんという、両手両足に重い障害のある方ですけどね、ひところちょっとこの方紹介しにくかったのですけれども、最近またいろいろ出てくるようになったので良いかなと思って、あれなんですけど。

乙武さん、五体不満足って読んだことありますか。あれどのぐらい売れたのかとネットで見ると、550万部売れたと言うのです。この前本人に会って、本当はどのぐらいと聞いたら600万部と言うのです。すごい記録的なベストセラーなんです。私は下世話な性格なので、彼はあの本一冊でどのぐらい印税を手にしたのだろうと気になって仕様がなくて、この間ちょっと計算してみたら、計算上は20億円ぐらいは手にしているはずなんです。多分最重度の障害認定されているはずですよ、彼。その方が一冊の本でこんなにすごいお金を手に入れる。何でだろうと。本人に才能もあったし努力したんだと思いますし、家族のしつけも良かったし、愛情もそういうようなのもあったのかなと思いますけれども、彼の本を読むと、やっぱり教育を受けることができたということに対する非常に強い思い入れが書かれておりますね。やっぱり教育というのは1人の方のいろいろな才能を花開かせる、そういうものがあると思うのです。

国は今、インクルーシブ教育というのをやっていこうとかであって、これはどういうことかと言うと、障害のある子もない子も、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すと。その場合にはそれぞれの子供が授業内容がわかり、学習活動に参加している実感と達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ生きる力を身につけていけるかどうか。随分ぜいたくなことが書かれております。

一緒に学ぶこと、同じ場で共に学ぶというのは、これは統合教育がまさにそうですよね。これまで日本であちこちで試行されてきた、実践されてきた統合教育と、このインクルーシブ教育は、果たして同じなのか、それともまだまだ違うのか、気になりますよね。

私は何年前に、この統合教育を日本で一番充実していると、胸を張っていた九州のほうにある中学校に行ったことがあるのです。やっぱりこういう医療的なケアが必要な生徒も普通学級の中におりました。なるほどなと思ったのです。聞いたら、どんな障害のある子が来ても絶対に断らないと言うのです。全て普通学級で受け入れていると。

何でそんなことができるのかというと、普通学級に受け入れた障害児には、全てマンツーマンで介助員をつけていると言うのです。それでも疲れてしまう場合があります。そのために、絶えず特別支援学級も用意してあって、その時々、本人の意思で好きなところを選べるようにしていると言うわけですよ。

見ていても、一般の生徒や先生たちも非常に自然な支援を彼らとしておりました。お金もかけているし、人もたくさん確保しているし、物理的なスペース、教室もちゃんとしているし、良いのはソフト面ですよ。非常に周りが彼らに自然な形でサポートしていました。なるほどこれは全国で1番うちが充実していると胸を張るのもわかるなと思ったのです。

ただ、体育館で合唱コンクールの練習をしている風景を見た時に、ちょっとおやつという感じがしたんですね。よくやりませんでしたか、クラスが固まって座って、順番にステージにあがって合唱をするのを下で待機するクラスはずっと座って待っていると。長い時間待っていると、みんな退屈しちゃうんですね。ざわざわ、ざわざわしているわけですよ。こういうのは自閉の子は、何かちょっと苦手かなと私は思いました。だっ広いところでざわざわしていると、ちょっと嫌がったりしますよね。自閉症の子はこういうの苦手なんじゃないですかねと言ったら、先生の1人が、いやそんなことないです。見てください、ちゃんと居ますよと言って、確かにこういう感じなんです。ウーンと私は思って、ざわざわがづらいものだから、もうずっとポツンと離れて見ていて、介助者の方がびたっと寄り添っているわけですね。これが共に学ぶ実感や達成感を身につけて、生きる力を身につけているのかななんて、ちょっとどうかと思って。その先生は、どうですか、うちは素晴らしいでしょうと。余りしつこく自慢してくるものですから、いやそうは思いませんと、こっちも意地になってしまって、喧嘩して帰ってきてしまったのですけれども、最悪ですね。

これ本当の話ですよ。一月ぐらいたった時に、同じ県で相談支援をやっている方から、私のところにメールがきまして、最近自閉の子たちが不登校になってしまって、もうストレスをためてためて、行動障害を起こすようになって、放課後等デイサービスにいっぱい流れ込んでくるんですよ、なんていうことを。この子はそうかどうか分からないですけど。何となく、ちらっと不安な思いがよぎりました。

みんな一生懸命頑張っているのはわかるのです。先生も、ご本人も、多分家族も頑張っていると思います。でもやっぱり知的障害、発達障害はわかりにくいところがあって、わかっているように見えてもわかってなかったり、平気なように見えても意外に心は混乱していたり、本人もストレスや混乱の原因が自覚できなくて、時間がずれて症状があらわれたり。

なので、私はインクルーシブ教育はすごく良いなと思うし、是非進めていってほしいと思うのですけれども、こういう見た目によくわからない、本人もよく自覚できていない。非常に傷つきやすい。こういう子たちの場合、非常に細かい合理的配慮をしてほしいし、それが本人のほうに負担かかってないかなというのを、ずっとフォローしていただきたいなと、そこだけちょっと気をつけてほしいなと思うのです。

実に本当に障害は多様だなと思います。こういう有名なトム・クルーズなんていう俳優さんも、ディスレクシアと、書かれている文字が読みにくいという障害がありますよね。日本でも勉強ができないとレッテル貼られていた子の中に、実は勉強そのものはできないことはないんだけど、書かれている文字がこんなふうに変形で見えてしまう。あるいはこんなふうに見えてしまう子がいるということがわかってきた。これはディスレクシアなんですよ。

今はこういうIT機器を使うと、こういうふうに見えてしまうものも、彼らが読みやすいように文字の配列をかえたり、文字が大きくなったりするというものがありますので、是非そういう、できるところからいろいろな彼らにあったものを組み込んでいただきたいなと思うのです。

決してわがままだとか、エゴで言っているわけではなくて、視力の弱い人が、メガネやコンタクトが必要なと同じように、こんなふうには文字が見えない人には、ちゃんと見えるような

ITのソフトも必要だということは理解してほしいのです。

日本の教育というのは何かできないところに注目して、みんな同じぐらいのレベルにしようというのが結構強いですよね。それやったら多分、この人はあられもないと思いますね。これはスティーブン・スピルバーグという映画監督ですけれども、実は彼もディスレクシアなのですね。何年前かにインタビューでカミングアウトしていましたが、彼は中学校の時に文字が読めないものだから、物すごい勉強ができなくて、2年続けて落第したそうです。ひどいじめも受けたそうです。普通だったら、日本は文字読めるようにみたいな勉強ばかり教えられますけれども、でも、彼の場合には、それはそれで仕様がなくて、でも映画が大好きで、そういう才能があるのであれば、そっちを伸ばしてあげようということで、今のこういうジョーズだとかE Tだとか、ジュラシックパークとか、何かすごいものを映画をつくっているわけですよね。

何か少しそういう彼らのできないところはありますけれども、できる面もいっぱいあります。ほかの人にないものもいっぱいあるので、本人の生きやすいような人生をみんなで認めていってあげる。そういう支援が必要だということを、多くの人に伝えていく。これが合理的配慮だったりするのだと思うんですね。

今、内閣府のホームページを開けると、いろいろな障害種別ごと、場面ごとの合理的配慮事例集みたいなものが載っていますので、是非参考にしながら、いろいろやってほしいなと思うのです。

私が最近思うのは、合理的配慮にしても、よく最近言われるようになった意思決定支援にしても、その土台にあるのは、やっぱりコミュニケーションではないのかなと最近思うわけです。これがないと、今日ここに来ることすらわからないですものね。コミュニケーションがうまく取れないと。だから最近は、手話を言語化しようという条例だとか、法律をつくろうなどという動きもあるのは、これは非常によくわかります。

この差別解消法ができてから、この情報保障というものが非常に注目されるようになりました。こういう手話通訳さんとか、要約筆記だとか、あるいは点字だとか、あるいは盲ろうの方の指点字や触手話みたいなものが盛んに支援、重要なものだという事は広めていこうという動きがありますけれども、もう1つ私の立場で言わせていただくと、では知的障害や発達障害の方に対する情報保障はどうなっているのだと、私は思うわけです。ここは正直言うと抜け落ちていると思います。

例えばこの文章を見てください。本指針において定める措置においては、「望まれます」と記載されている内容等法的義務ではないものも含まれますが、法の目的を踏まえ具体的場面や状況に応じて柔軟な対応を積極的に行うことが期待されるものです。

わかりますか、何を言っているのか。これは何の文章かということ、厚生労働省がつくった差別解消法のガイドラインですよ。合理的配慮をしなければいけないという法律を進める、そのガイドラインがこんなに合理的配慮がないという、見事にこのわかりにくい文章は、全然国はそこに配慮ができてないという良い証拠だと思います。

そこで私は、今肩書で使っている一般社団法人スローコミュニケーションという法人をつくって、ここは知的障害の方にはわかりやすい情報を研究して開発して、広めていこうという団体なのです。その前身は育成会のステージという新聞なのですからけれども、これはもう20年近く出してきました。知的障害を持ったご本人と福祉職員さんと我々新聞記者が共同で年間4つですね、季刊号で出てきたのです。いろいろな、やっぱりわかりやすい文章のルール、知的障害の方にとってのわかりやすい文章のルールというのがある程度わかってきました。

例えばこういうことですね。長いだらだらした文章、さっきみたいのはだめですね。短くて簡潔なシンプルな構成の文章がわかりやすい。複合文もだめですね。難しい漢字だらけもだめ。平仮名だらけでもわからないですね。二重否定だめ、比喩だめ、抽象的な言葉とか省略もだめ。これはどういうことかということ、例えば二重否定、こんなことがありますね。「もう恋なんてしな

いなんて言わないよ絶対」、この人何言いたいのでしょうか、これ。これ日本語独特の表現なのです。ハイコンテキストと言うのですけれども、本当に主張したいことがあるのだけれども、わざと否定したり、おとしめたりしながら、遠回しに本当に言いたいことを伝えるとか、あからさまに表現すると反発されるので、遠回しに言うとか、あるいは恥ずかしいので何度も否定しながら、本当の気持ちを伝えるとか、いろいろな文化としてあるわけですから、これはこれで大事です。

私なんか、文学表現でこの比喻とか、二重否定と、私はすごく自分自身も多用しますが、ただそれとは別に、この多様性のある社会を実現するためには、むしろこういう固有の文化が障壁になる場合が結構多いのです。なので、それはそれで大事にしながら、でも多様性のある社会に通用するような文章表現というものを考えていきたいと思いますということなのです。あと、比喻もそうですね。「まだ青いやつらの黄色い歓声を浴びていると、玉虫色の結論ではいけないと思えてきた。やっぱり白黒はっきりさせようじゃないか」と、この日本語、この色の比喻がすごく多いのですよね、これ。これは知的な障害ではない人にもわかりにくいです。

この前、私、大学でこれやったら、玉虫色ってわからない子がいまして、ギョクチュウシヨクと読んだ。君、玉虫って見たことないのかと言ったら、ないと言うのですよね。だから、若い子には今通用しないのですよね、こういう比喻が。あと複雑な長い文章もだめですけれども、省略され過ぎた文章もわかりにくいのです。意外にスポーツに関する新聞記事とか、ニュースというのは省略表現がすごく多いのです。例えばこれです。「あまく入ったスライダーを大谷が右へ運んだ」、これ野球がわからない人はちんぷんかんぷんですよ。あまく入ったスライダーって味があるのかとか、運んだというのはどうやって運んだの、お盆に乗せたのかとか、あるいは右へ運んだってどういうことだろうと、本当に野球がわからない人は全くわかりませんよ、これ。

例えば、「長友からのクロスを頭で合わせてネットを揺らした」と、これもわかりませんよね。この2つの文章には、実は主役が抜け落ちています。ボールですよ、ボールがどこにも書いてないです。運ばれたのもボールだし、あまく入ったのもボールだし、長友がクロスでパスしたのもボールだし、ネットを揺らしたのもボールですよ。ボールどこにもないです。なぜかというところですよ。スポーツが好きな人は、わざわざ言わなくてもわかること。つまりボール。これは省略するほうがスムーズに早く情報伝達ができるのです。だから、習慣的に新聞やテレビでニュースを見る人には、そのニュースの前提や背景をわざわざ説明しなくてもわかるというふうに思っているわけです、情報を出す側が。同じ時代に同じ国で同じ内容の公教育を受けてきた私たちには、無意識のうちに共通認識が植えつけられている。物すごく強いのですよ。その共通認識というのは集団的な先入観に従って、それに入れられない人を排除するということにつながっていくわけなのです。

この知的障害とか自閉症の世界、人たちというのは、私たちが当たり前と思っている共通認識がなかったり、違ったりする人が結構いるのです。その人のことを理解するためには、その人が何を理解しているのか、何が理解できていないのかというのを、まず私たちが理解しなければいけないと。理解できない相手のせいばかりにするのではなくて、こちら側が理解できていないから伝わらないのですよ。理解できなくても、まず違いというものを自覚することが理解を促すことにつながっていくということなのです。

見渡してみると、世の中には難しい文章がいっぱいですよ。例えば新聞記事、法律、判決文、政治家や官僚の国会答弁、取扱い説明書、医薬品の使用上の注意、保険約款、看護師、介護福祉士の問題、運転免許試験の問題。なんて難しいだろうと。これ分析していくと、例えばよくわからずに書いている。これは新聞記事が典型です。どうせわからないだろうと、ばかにしているとか、あるいは本当に知られたくないことがあるのかもしれないとか。あの細かい字の取扱い説明書とか、保険約款で見ると、何か知られたくないことがここにあるのではないかと、私なんか思ってしまいますけれども。それとか、相手のことを知らないし知ろうともしないとか、実は排

除したい。外国人介護士、看護師を排除したいという、どこかにそういう本音があるものだから、日本人でも読めないような漢字を使った、あの試験の問題ができたりするわけですね。

そういうものを解いていくことによって、多様性のある社会をつくっていくという取組です。これがスローコミュニケーションというね。今やってほしくないですけども、後で休憩時間とか終わった後に、皆さんのスマホとかパソコンでスローコミュニケーションと検索してみてください。毎週毎週、一般のニュースがわかりやすく加工されて、無料で配信されています。しかも漢字は余り使わないようにしているのですけれども、使う漢字は全てるびが振ってあって、しかも音声ガイドも一緒に載っている。

こういう文化を、キャッチフレーズは、「わかりやすい文章 わかち合う文化」。やっぱり文化をわかち合わなければ、コミュニケーションはうまく通じません。文化というのは、外国の方の文化もそうですし、知的な障害や自閉症、発達障害の方の文化も我々が理解しなければいけないと、そういうことですね。

こういうアンドロイド版は、アプリも開発されておりますので、是非ご利用いただけると良いなというふうに思っています。

これまで言ってきたように、合理的配慮をやっていくと、障害者だけではなくて、一般の人にも良い影響が広がってくる。ここは私、日本の停滞感、閉塞感を打破していく大きな鍵だと実は思っています。

実際に障害のある方への配慮が、我々にも非常に便利になったものが幾つもあります。例えば、トイレのウォシュレットというのがありますよね。あれはもともと障害者用に開発されたものなのです。自分で処理できないという人がおしりを洗ってもら。あれがあって我々すごい快適ですよ、今。それとか、車椅子用トイレが進化して多目的トイレというのがあちこちでできるようになってきて、あれ我々もすごくあれがあるおかげで便利になってきましたね。

これ障害ではないのですけれども、お年寄りのためのシルバーシート、今余り言わないですね、シルバーシートと。今はただ単にプライオリティシート、優先席という名前でしかついてなくて、マークを見ると妊娠中の女性とか、小さなお子さんを連れの方とか、けがをした方、内部疾患の方、そういう方にまで広がっていったのです。それによって多くの方が生活が便利になってきたというのが言えると思いますね。

わかりやすい説明書とか、情報保障ということをやったように、あれは知的障害者だけではないです。ああいうことをやっていくと、外国からやってくる労働者や観光客にも非常に便利なわかりやすいもの、町になっていくだろうというふうに思うのです。

こんなふうに考えていきたいなと思っているのです。実は、もう1つ今日皆さんに紹介したいのは、この合理的配慮というのは、ビジネスにも非常に良いヒントが隠れているのです。

例えば今年は東京オリンピック・パラリンピックが開かれますね。障害のあるアスリートには随分注目されるようになりました。では、観客のほうはどうでしょうか。障害のある観客。例えば、日本の野球場、どのぐらい車椅子用のシートが用意されていると思いますか。例えばそこにある東京ドーム、あれはぎっしりお客さんが入ると5万人近く入るのです。あの5万席近い座席の中に、車椅子用のシートというのは何席あるかご存じですか。12席なのですね。これ車椅子ユーザーと一般の人口比と比べると、明らかに少な過ぎるのですよね。まだ良いほうで、旧広島市民球場は、たった6席です。それというのは〇〇さんという大阪の車椅子の方が、まだそんなの良いよと言いましたね。僕は子供のころ、阪神ファンでよく甲子園に行ったんだけど、当時の甲子園球場は3塁側にちょこっとなかったと。自分、阪神ファンなのに、いつも巨人ファンのど真ん中でしか応援できなかつた、怒ってましたね。そんなものなのです。

つまり、障害のある方が野球を見に来るということをそもそも前提としていないのです。だから、アリバイ的にちょこっとならだけなのです。

でも、今は随分変わってきました。去年はだめだったのですけれども、この前セリーグ3連覇

したのは広島カーブですよね。カーブが今使っているのはマツダスタジアムと言います。あのマツダスタジアムは、車椅子用シート何席あるか知っていますか。東京ドームが12、旧広島市民球場が6、マツダスタジアムは142あるのです。何でそんなにあるのかというと、あれは10年ぐらい前にオープンしたのですけれども、あれを設計した方が、当時アメリカに行って大リーグの野球場を視察して回ったと言うのです。そうしたらいっぱいあったと言うのです。

アメリカは1990年にADA、差別禁止法をつくりましたね。それによって大規模施設や、公的施設のバリアフリー化を徹底して進めていったのです。それを見た方が、ああ日本もいずれこういう社会になるだろうと見越して、マツダスタジアム142つくったと言うのです。

それだけではなくて、あそこのスタジアムには、多目的トイレが24カ所あるのです。そのうちの半分はオストメイト対応型になっているのです。それだけではなくて難病だとか知的障害、発達障害、見えない方のために、マンツーマンでいろいろな相談に乗ってくれるホスピタリティスタッフという球場職員が、毎試合10人は用意されていると言うのです。それが広がって行って、障害のある観客がどんどんやってくるようになったのです。

3年ぐらい前に聞いたら、車椅子用シートというのは、もうなかなか手に入れられなくなってきたぐらい来ると言うのです。考えてみると、障害のある方も野球を見に行きたいという方いっぱいいますよね。スポーツ観戦、それから音楽とか、映画とか、だって目の不自由な方の団体が会員さんにアンケートしたら、一般の映画館で月に1回は映画を楽しみに見に行くと言う方が4割だと言うのです。そのぐらいやっぱり強いニーズがあるのですね。スポーツや音楽に対して。

ところが、施設とか設備面が配慮されていない。だから彼らは排除されているのです。あと、運営する側にもそういう配慮が足りない。何年か前、安室奈美恵さんのさよならコンサートで、ダウン症の子が中に入れてもらえなかった、とんでもないことが起きているわけですよね。ここにカーブという球団や、マツダスタジアムは目をつけて配慮するようになったのです。そうしたら、もともと強いニーズを持っていて、排除されていた方を掘り起こして、うまく取り込むことに見事に成功しているビジネスモデルですよ。あれは、この多様化している時代のビジネスモデルの、私は典型だと思いますね。

ここ東京だから言いにくいのですけれども、カーブファンが言っていました。経営的にも、あるいはチームも、強くなるチームというのはそういうものなのだと。観客も1人1人に個々の配慮ができるチームというのは、選手の1人1人の特性を見抜いて伸ばすことができるのだと。それをしようともせず、人様のチームがせっかく育てた4番バッターとエースをお金でかき集めているチームは勝てないと。ちょっと東京あたりなかなか言いにくいのですけれども、また特に去年は言いにくかったですけれども、でも私もそうじゃないかなと実は思ったりしております。

なので、この多様化した社会の中での合理的配慮の意味、意義というものを、私たちは本当に大事にして、もっともっと広めていきたいなというふうに思うのです。

それともう1つ言わなければいけないのは、これです。良いことばかりでは実はない。実は、ある障害の方に合理的配慮すると、その近くにいる人がちょっと我慢しなければいけないとか、ちょっと損しちゃうという場面も残念ながらあります、それは。だって役所とか、どこのスーパー行っても、車椅子用の駐車マークというのは入り口に近いところにありますよね。雨の日とか、寒い日とか、何で障害者だけあんな良いところにとめられるんだと、苦々しく思う人とかいるじゃないですか。そのぐらい良いじゃないかと私思いますけれども。人間というのは、何か自分が損して、誰かが得しているのを見るのを嫌なのですね、どうも。さあその人たちにどうやってこれを伝えていくかということなのです。

私は思うんです。我々大多数の生活が便利になっていくというのは、それに乗っかれない一部の人を今の状況に置き去りにするのではないのです。もっと不便にしているのです。だって、社会の資源も一緒に持って行っちゃいますから。

例えば、今私、これがあるおかげで、非常に便利になりました。例えば本屋さんに行って、結

構本を買うのですけれども、雨の日とか、暑い日とか、寒い日、行きたくないです、なかなか。すぐに行けない場合もあります。これがあると、電子図書だとか、あるいはアマゾンに注文すれば、二、三日後には自宅に本が届きます。いなくても電子決済なので、全部そこでお金のやり取りをしなくて済むのですね。これのおかげで私の生活はすごい便利になりました。

ところが、これを使えない人は今どうなっているのかというと、アマゾンや電子図書が普及していく一方で、町の本屋さんがすごい勢いでなくなっているのですよ。そうすると、本屋さんに行って本を買うということ自体が難しくなっているのです。大多数の生活がこっちにいつちゃくと、それに乗っかれない人はどんどん不便になっちゃうということなのです。こういう関係性にあることを、やっぱりもっとも我々が自覚すべきではないのではないかなと思います。

日本で初めて差別解消法、解消する条例をつくったのは千葉県だと言いましたけれども、その時に29人のメンバーが丸1年間議論して条例の原案をつくりました。その座長を私がやらせてもらったんですけれども、その29人の中には、障害当事者が結構おりまして、中に耳の不自由な方が1人、委員としておりました。彼はいつもこういう手話通訳さんを連れて来るのです。自分の席の前に座ってもらって、我々が議論していると、この方が彼に手話で伝えるのです。彼はこの手話がなければ我々の議論わかりませんから。だから連れてくるわけです。ところが、これが時々、我々一般の委員に対して怒るのです、彼は。何で私がいつも手話通訳連れてこなければいけないのだと。ここは障害者の差別をなくそうという研究会ではないのかと。私1人が、この通訳を連れてこなければいけないという過重な負担をすること自体を、皆さん差別だと思わないのかと、こう怒るのです。大体私が連れ来た、この手話通訳。皆さんのあなたたちの役にも立っているじゃないかと。あなたたちの役に立っていること、何で私ばかりやらなきゃいけないんだ、こう言うのです。これどう思いますか。

私は実は心の中で、ちょっとそれはしょうがないじゃないかと思っていました。だってそれは我々に求められても、だって私たちは通訳さんがいなくても自分で聞けるし、自分でしゃべれますからね。申し訳ないけれども、この手話通訳が必要なのは、あなた1人なんだから、あなたが自分で連れて来るということを、我々に対して怒らなくても良いじゃないかと、そう思ったのです。そう思いませんか。でもそんなことを口に出したら大変な目に遭いますよ。わかるから、私言わなかったのです、黙っていた。この方は非常に穏やかで理知的な方なのに、この手話通訳を連れて来なければいけないということだけが許せないと、いつもむきになって怒るのです。何なんだろうかと、私、わからなかったのです。

ある時、聴覚障害連盟という彼の団体が、条例についてシンポジウムやってみんなで考えようということになりました。私も座長だから出てくれと言われて行ったのです。良いですよと言って。会場は、この半分ぐらいだったです。だけど聴覚障害連盟なので、皆さん耳が不自由な方なのです。シンポジスト6、7人いましたかね。私以外もう全員耳が不自由なのです。始まる前に、控室でみんなでお弁当食べながら打ち合わせをすることになりました、進行について。お弁当食べ終わって打ち合わせが始まったのですけれども、これは当たり前なのですけれども、皆さん手話で打ち合わせをするわけですよ。そこに手話通訳はいないのですよ。ということは、私はわからないわけですよ。何とかなるだろうと思って、じっと目を凝らして見ていたけれども、わからないものはどれだけ見つめたってわからないですね、これ。

皆さん、私がわからないということに気がつかずに夢中になってやっているのです。こっちはだんだん焦ってきますよね。誰かが手話やりながら、ははっと笑うと、自分が笑われているような気がしてくるわけですよ。だんだんいたたまれなくなって、私はノートに手話通訳さんいないのですかと書いて、彼らに見せたの。彼らは、えっみたいな顔して、きょんととして顔を見合わせているのですね。何で、自分たちやれば良いじゃない、みたいな顔をしているのです。こっちは腹が立ってきてしまって、身振り手振りで、私は皆さんの手話が私にはわからないよとやったら、やっとなんか気がついてくれて、なんだそういうことだったんだと笑っているのです。笑っている

場合かと。本番、一体どうなるんだと。帰ってしまおうかと思ったけれど、それも大人げないなと思って、どきどきしながらステージに上がりました。そうしたら100人ぐらい一斉にこっちを見ているじゃないですか。もうこっちはどきどきですよ。ふと見ると、このステージの端に、通訳さんらしい人が立っているのです。ところがその時の通訳さんの役割というのは何かというと、手話なんか一切使わない手話通訳なのです。意味わかりますか。マイクを持って立っているのですよ。だって皆さん手話で発表しますから。手話を見て、手話で通訳するって意味ないですよ。だって会場全員手話がわかるのですから。わざわざこの方がいなくても、ここで手話やればみんなわかるわけですよ。

だから、このシンポジウムは通訳が要らないのです。手話だけで完結するシンポジウムなのです。でもそれをやられてしまうと、1人だけついていけない人がいます、ここに。私ですね。だから私が自分のためにだけに通訳を連れてこなければいけなかったということなのです。そんな機転はきかないだろうというので、聴覚障害連盟の方が私のためだけに通訳を用意してくれていたということなのです。でも、厳密に言うと、これ私のためだけではないのです。発表の順番がだんだん回ってきて、私になりました。私は目の前のマイクをもって話し始めました。そうしたら、この通訳の方、あわててずっと自分の持っていたマイクを床に置いて、今度は私の声を聞きながら、こう手話を始めます。会場中が一斉にぱっとこっちを見るのです、初めて。そこで初めて私が何をしゃべっているのかと皆さんわかるのですね。

つまり、手話通訳さんというのは二通りの役割があるのです。今私はずっとしゃべっていますから、話し言葉で。この通訳さんずっと手話使います。でも、もし今私が仮にマイクを置いて、なんてやり始めたら、皆さんほとんどの方わかりませんよ。その時、この方が私のマイクを取り上げて、話し言葉で通訳をしてくれるのですよ。

(手話通訳者) そうです。

(野澤) ということなのです。

つまり、どちらが発表の機会が多いかによって、手話を使うか、話し言葉を使うかの、この比重が変わるだけなのですよ。

ここが大事です。多数派は自分たちの都合の良いコミュニケーションを勝手に選ぶのです。それが一部の人に全くわからないということ自体が、気がつかないのです。これが障害者と社会の間で起きている差別の核心部分だと私は思います。悪意のある差別もあります。だけど大多数は、知らない、あるいは良かれと思っていることが逆に全然違うことになっているとか、そういうことが結構あるのです。

我々は、だって多数派ですよ。自分たちが歩きやすい便利な道を勝手にどんどんつくりますよ。一部の人にとってはとても歩きにくくて危険な道かもしれないです。我々が自分たちが使いやすい建物をつくり、町をつくり、法律をつくり、ルールをつくります。それによって、一部の人がとても暮らしにくい町になっているかもしれないということ自体が、わからなくなっちゃっているという、こうことなのですよ。

まあそれでも良いじゃないかと言う人もいます。社会というのはそういうものなんだと。大多数の側が便利になって豊かさを追求して行って、どんどん社会が繁栄し、そこから滴り落ちるしずくに乗って一部の恵まれない人が潤えば良いじゃないかみたいな、これは経済というトリクルダウンの法則なんていうことを言いますけれども、でも、我々ずっと多数派にいられるかどうかわからないですよ。年とって加齢に伴う障害とか病気というのは、必ず誰でも大抵出てきますよ。自分は辛うじて元気かもしれないけれども、自分の家族や友達がいつそういう少数派になるかわかりません。そういうことも頭の片隅に置きながら、ほんのちょっとだけですよ。我々がほんのちょっと配慮する、我慢することによって、圧倒的に不利にしている一部の人たちを同じような仲間として、社会の中に取り込んでいく。こちらのほうが何か長いスパンで考えた時には、誰もが安心できる社会につながっていくんじゃないかなんていうことを、私は思っており

ます。

いつも、こういう話をする時、皆さんに協力してもらって、これやるので、ちょっと協力していただけますか。この5つの言葉のうちに、もし自分が言われた時、あれっ、今私悪口言われたのかなと思いきや、1つで良いので手をあげてみてください。2つでも3つでも良いです。

1番、「まじめだね」、これを言われたら悪口だなと思う方いらっしゃると思います。2番、「おとなしいね」、これはどうでしょうか。3番、「天然だね」、はどうでしょうか。4番、「個性的だね」、はどうでしょうか。5番、「マイペースだね」、はどうでしょうか。ありがとうございます。基本的には標準型ですね。大体どこでやっても3番、5番が多いのです。ほかに、1、2、4なんて余り手があがりませんよ。意外に手あがりましたね。これはやっぱりこういう自立支援協議会のような、障害のことについて詳しい方がいっぱいいらっしゃるからだと思いますね。これは地域によって結構違って、大阪でやったら1番が殺到しましたね、これ。やっぱりまじめだねなんです、大阪の方は。隣の兵庫県の障害児の親の会でやったらゼロなのです。あれ、関西はまじめってだめなんじゃないですかと言ったら、大阪と一緒にすると言われてたのですけれども。

これは何かというと、静岡大学とラインというソーシャルネットワーキングの会社の共同調査で、対象は中学2年生、つまり子供たちは何に悪口を感じるのかということ、圧倒的にこれだったのです。個性的だね。これなんだろうということですね。

私、日本というのはやっぱり同調圧力の強い社会だと思います。特に学校の文化というのはそうじゃないですか。何年か前ありましたよね、もともと髪の毛が茶色い女の子が、わざわざ黒く染めさせられてみたい、ちょっと信じられないようなことが起こる。何でもかんでもみんなと同じでなければいけないみたい。これはやっぱり軍隊だとか、戦後の経済成長を推進してきた原動力になった工業製品の大量生産、これも基本的にはベルトコンベヤーについて、隣の人と同じスピードで同じ内容の作業をやってくれないと困るのです。

つまり学校教育にもこういう、何か均質な労働力を求めてきたのではないのかなという気がします。個性よりも均質さ、忍耐を伴う集団主義、横並びの協調性、こういうものを非常に求めてきた。そこからはみ出す子供というのは何かいじめの対象になったり、不登校に追い込まれたりするケースが結構あるのですよね。

さっき言ったスピルバーグ監督なんて日本にいたらとてもつらい子供時代を送ったと思いますよね、彼は。

産業ということを考えたら、これまでは良かったのでしょうかけれども、こんなふうにならぬうちに何もかもアジアの諸国が日本を追い越すようになってきた時、ただの工業製品の大量生産だけではもう太刀打ちできなくなってきた。そこは今は、やっぱり多様性のある社会、多様性のある職場からイノベーション、新しいものの考え方や、新しい技術革新とか価値観を生み出して行って、新たなものをつくり出していかないと、なかなかこの先は切り開いていけないと思うのです。そういう時に、これまではみ出して排除されていた人たち、子供たちの存在というのは非常に貴重だと思います。

私、最近、不登校の子供たちの支援をする人たちと話すことがあるのですけれども、彼らがよく言います。子供たちに、何で学校嫌になっちゃったのと聞くと、割と同じようなことをみんな言うと言うのです。体育の時間の跳び箱が嫌だった子がすごく多いと言うのです。私も記憶にありますけれども、先生が40人のクラス全員に4段を飛べるようにと、全員5段を飛べるようにする。運動神経の良い子は一発で飛べて離れていきますよね。飛べない子だけがみんなが座って見守る中で何度も何度も無様な格好をさらしながら、笑いものになりながら飛ぶ訓練をさせられると言うのです。飛べるとみんなが拍手して感動の物語なんて言いますが、それを強いられる子はさらし者にされているみたいでものすごくつらかったと言うらしいです。それが学校に

行けなくなる結構の大きな理由だと言うのです。

北海道のある町役場でこんな話をしていたら、何か体格の良い職員さんが、実は私も跳び箱嫌だったのですと。へえ、あなたみたいなスポーツマンタイプもだめだったんですかと笑ったら、何か涙目になってきたので、本当につらかったんだろうなと思ったんですね。私は、学校を卒業して役場に入ったと。役場に入って20年たつただけけれども、振り返ってみると跳び箱を飛ばなきゃいけない仕事って1つもなかったと言うのです。なのに、何で跳び箱ばかりあんなにこだわって、先生が私つらい思いをさせられたんだろうと。何か随分、子供たちを大変な目に合わせているのではないですかね、この国というのは。

多様性のある社会をつくるためには、できないことには少々目をつぶってあげて、できることを伸ばしてあげるみたいなことを考えていったほうが良いんじゃないかなと思うんです。次の時代に何を託すかということなのですけれども、アメリカでADAをつくった時の担当の官僚の方が何年前に日本に来た時に、私、インタビューさせてもらった時に、何が1番大事だろうと言ったら、彼はこう言いました。「差別禁止法をつくっても目の前にある現実を変えることはできなかった」と、注目されたけれども。しかし、アメリカは未来を変えることができたというわけです。未来を変えるためには、何と言っても教育だと。子供たちや若者たちに、この障害者のことをわかってもらうんだと。障害者のいる多様性のある社会のすばらしさを知ってもらうんだと。今すぐは変わらないと、でも彼らが成長して社会を担うようになった時に、ゆっくりとだけでも少しずつ社会は変わっていくよと言われたのです。

私も本当にそんなふうに思うのです。6年ほど前から、この東京大学で障害者のリアルに迫るゼミという、学生の自主ゼミのお手伝いを私やっています。こういう例えばALSの〇〇さんという方ですけれども、彼は全身動きません。全くしゃべれませんし、口から物も食べられません。こういう方に来てもらって、でも彼は唇と脛がちよっと動くので、それで合図して母音と子音を合図して、その介助者が言葉にしてコミュニケーションをします。最初、学生たち、ドン引きだったのですけれども、〇〇さんこの体で海外旅行どんどん行くし、国際会議で発言したりする。そんな話を聞いていたら、学生のほうは変わってきちゃって、その後、同じ駒場のキャンパスの中にあるレストランで懇親会なのですけれども、ここにも3時間ぐらい閉店まで付き合ってくれました。

〇〇さんは口から一切物を飲み食いできない方ですよ。胃ろうをやってますから。よくその人の前で学生たち平気で無神経で、こんな食ったり飲んだりできるものだなと思いますけれども、〇〇さんも負けてなくて、ヘルパーさんに胃ろうのキャップを外させて、ワインをジョボジョボ直接胃に注がさせたりするのです。みんなびっくりしちやって、目を白黒するわけです。

終わりがけに、1年生の男子学生が、〇〇さんにこんなことを言うのです。「僕は東京大学に入るのを人生の目標にしてみました。でもそれがかなってからは、今何をして良いかわからなくなっちゃっているのです。〇〇さんを最初に見た時に、なんてかわいそうな人としか思えませんでした。でもいろいろな話を聞いているうちに、今は一体どっちが幸せなんだろうとわからなくなっちゃいました。〇〇さん教えてください。もしも仮に、今、あなたの病気が治ったとします。僕たちみたいな健康な体を手に入れたとします。でもここにボタンがあります。このボタンを押すと、今のあなたの体に戻ります。その時〇〇さんはこのボタンを押しますか」と、こう聞いたのです。

彼の脛と唇がすかさず動いて、介助者がそれを読み取りました。絶対に押します。どうしてですかと、みんな困らだりしているのです。また脛と唇が動きました。「体が動かないのは確かに不自由だけれども、心が動かない不幸のほうが、私には耐えられないのです」。誰も何も言えなくなっちゃったんですね、学生。

全身動けずに、死にいつも直面している〇〇さんが、若くて才能があって、もう前途洋々たるこの現役の学生たちに対して、君たちの心は動いているのかと、こう言っているのです。誰も答

えられないのです、それに対して。

3年前の7月26日の未明、神奈川県相模原市の津久井やまゆり園に、元職員の男が押し入って、19人の障害者を殺しました。今、刑事裁判始まっていますが、彼はやみくもに殺したわけではないと言っているわけです。全く自分では動けずに、こちらが声をかけても返事もできない障害者を選んで首をさいていったんだと。そういう障害者に生きている意味はない、価値がない、だから自分が安楽死をさせた。とんでもないことを考えて実行してしまった、哀れで愚かな男だと、私思います。今になって死刑は嫌だと言っているらしいですけども。

〇〇さんはまさに文字通りそういうタイプですよ。ヘルパーさんがいなければ何も自分では反論できませんから、でも私、この方が生きる意味がないなんて全然思えないです。むしろ逆だと思いますね。たった1回の授業で、たった一言でこれだけの現役の東京大学の学生たちの心をつかんで、価値観を揺るがすようなことができる人というのはそうはいないと思いますよ。

1番向こうにいるのが〇〇君という子ですけども、彼は現役で麻布高校を出て、現役で東大に入って、1年生の時にアメリカのハーバード大学と東大との共同のイベントの時に、東大の側の学生のリーダーまで務めた子で、同学年で有名な子なのです。このゼミの運営を手伝ってくれて、4年生になって就活したら、どこへ行ってもすぐ内定もらっちゃうんですね。どこの大企業に行くのかなと思ったら、ある時、ちょっと相談に乗ってくださいとやってきて、いろいろ迷ったのですけれども全部断りましたと。どうするんだ、大学院にでも行くのかと言ったら、障害者施設で働きたいのと言うのです。本気かと言って、今本当に働いているのです、滋賀県の救護施設という、1番どこにも行き場のない方たちが最後に集まってくる措置施設ですよ。行き倒れになって記憶を失って自分が誰かもわからない人が来たり、ホームレスになった人が来たり、あるいは刑務所を出たけれども、行き場がないという人が来たり、そういう人たちの、彼は泊まりやりながら支援するわけです。時々首絞められたり、スリッパ投げつけたり、怒鳴られたりしながら、私は彼のお母さんから、大変恨まれまして、何てことしてくれたんですかと。

この前も、彼と会っていろいろな人の前で話す機会があった時、彼言うのですよ。僕はいつ辞めちゃうのかなと、ちょっとひやひやして見ていたら、どうだと聞いたら、「やっ和本物の社会につながる事ができたような気がします」、こう言うのです。

彼は、自分は学歴社会を勝ち抜くことだけを意味があることだと思ってやってきたと。階段を登り詰めて頂点に立った時に、その先が何も見えなかったのです。心がうつろだったと。その時に出会った、この〇〇さんに、君命って何だと思う、君は何のために生きているのと問いかけられた。何もそんなことを考えてこなかった自分が、ガラガラと崩れていくのを感じたというのです。こういうことを私に突きつけてくれた障害のある方の支援をしながら、もっともっと深いことを考えていきたいのと言うのです。

もう1人、彼の1年後輩で〇〇君という子がいて、彼は東進ハイスクールの有名な先生の1人息子なんです。もともと娘だったのですけれども、LGBTで息子にかわった子なのです。この子も優秀で、日本語と英語とアラビア語ができるのですよ。お父さんと約束して大学院に行く予定だったのが、今、やめて生活困窮者の支援センターで働いているのです、彼も。お父さんに怒られて勘当されて、精神障害の娘に追い出された年老いたお父さんと一緒に、シェルターで暮らしていたりなんかしているのですけれども。

その彼も、この前会ったら言っていましたね。このゼミに関わって彼はうんと変わりました。それまで暗くて、もう適応障害起こしてしまっていて、学校にも来られなかったような子が、このゼミを通していろいろなこういう方たちとの出会いの中で、自分でお父さんにつけてもらった名前を捨て、新しい名前を手に入れて、貯金を全部はたいて80万円をかけて、胸を取る手術をしたのです。彼はこの前言いました、「私は男になりたかったわけではないのです。私は私自身になりたかったのです」と言うのです。

自由というのは、何かの選択肢があったり、いろいろな勉強ができたり、何か可能性があるこ

とではないと思います。追い詰められて、追い詰められて、ぎりぎりの果てまで追い詰められた時に、たった1つそこに残されたもの、それが自由ですと、彼言うのです。

何か、こういう子たちに、本当に生きる意味は何なんだろうということを突きつけてくれる、この障害のある方たちですよ。私たちはこういうものをこれまで知らなかったです。この社会はこういう人たちの存在を切り捨ててきた社会です。でも、この人たちのおかげで、我々はこのからの今、すごくピンチに陥っている日本をひよっとしたら救ってくれるのはこういう人たちじゃないのかなとすら、私は今思っているのです。

この多様性というものが、この国の社会に本当にこれから求められるもの、この障害のある方たちがそれを担っているものというのを、もう一度私たちは再確認していきたいなど、そんなことを思っております。

済みません、時間が来ましたので、この辺で終わりにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 野澤和弘さん、ありがとうございました。

これから第2部、パネルディスカッションを行います。ステージの準備をいたしますので、しばらくの間、ご着席のままお待ちください。

## パネルディスカッション

### 障害のある人のホンネ：「暮らしやすい社会」とは？～いろんな視点から社会を見つめてみると～

(司会) それでは、第2部を開始いたします。

第2部は、障害のある人のホンネ：「暮らしやすい社会」とは？～いろんな視点から社会を見つめてみると～と題し、パネルディスカッションを行います。

ご登壇をいただきました皆様をご紹介します。

まず、パネリストの皆様です。

中央のテーブルから、一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構代表理事、内布智之さんです。

東京都自立支援協会委員、社会福祉法人東京都社会福祉協議会知的発達障害部会本人部会代表、小倉千明さんです。

社会福祉法人恩賜財団東京都同胞援護会、立川福祉作業所所長、宮本浩史さんです。

認定NPO法人東京都盲ろう者友の会会員、道見美由紀さんです。

続きましてコーディネーターです。左側のテーブル、東京都自立支援協議会会長、武蔵野大学人間科学部人間科学科教授、岩本操さんです。

では、ここからのパネルディスカッションの進行は、岩本会長にお願いをいたします。

(岩本) 改めまして、司会を務めます岩本です。よろしくお願ひいたします。

今の野澤さんの非常に聞きやすいお話のバトンを受けて、第2部では、4名の方に前に出ていただきまして、最初、20分ずつお話をしていただきたいと思っています。

このタイトルなんですけれども、暮らしやすい社会とはということで、いろんな視点から社会を見つめてみるとというようなタイトルにしました。これは、私自身も非常にこの思いが強くて、私は東京都の協議会でも関わらせていただいているのですけれども、武蔵野市の自立支援協議会でも10年ぐらい活動しておりまして、そこでやっぱり当事者の方といろいろお話しすると、本当に目からうろこと言いますか、私がいかに普段自分の物差しで物事を見ているかなということに気づかされるのがすごくたくさんあって、しかも非常に日常的なことが多いのですね。

例えば、みんなで障害者福祉計画を策定する時に、その報告書でレイアウトはこうしたほうが格好良いんじゃないかなと思うと、そのレイアウトが点字にするとすごく見にくいんだというふうに言われたり、あるいは障害のある当事者の方が、みんなでバーベキューをしよう、地元のバーベキューの申し込みをしようと言うと、ファクスしか受けつけていませんというのがあったとか、本当に日常的なことで、はっとさせられることがたくさんあります。

こういった声は、是非多くの方に知っていただいて、我々が見ているというのは、ほんの一部で、いろいろな面から社会というのは見えてくるんだなということを経験する機会があったら良いなと思って、今日は登壇していただきまして、私たちにいろんなことを、気づきを与えてくれるんじゃないかというふうに思っております。

まずお三方、4名の方にお話しただいてから、休憩をとりたいと思いますので、まずはお聞きいただきたいと思います。

では、トップバッター、内布さん、よろしくお願いします。

(内布) 皆さん、こんにちは。ご紹介に預かりました、一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構、代表理事の内布智之と言います。よろしくお願いします。

お手元の資料にもあるかと思うんですけれども、ちょっと今回、ご依頼いただきました内容について、私のほうで簡単ですけれども、文章を考えさせていただいております。ちょっと最初のうちは、読みながら少しご説明差しあげながら進めさせていただきたいと思っております。

最初なんですけれども、ちょっと私が疑問に思うこと、あとはちょっとご提案というか、考えを述べさせていただきたいと思ひまして、全体的なところを進めさせていただきたいと思ひてお

ります。

では、内容に入っていきます。文章のほうですけれども、障害者は健常者から見えた「障害を持った人」として定義されているものであり、障害者とは健常者の視点でつくられているものと言えるのではないのでしょうかということ、先ほどの基調講演のほうにもありましたように、いわゆる障害を持ってない人たちの視点からつくられている社会だと思っています。私も精神障害ですけれども、いろいろ日々生活している上で、ここのところはやはり障害理解されていないのではないかと、やはり障害をお持ちでない方たちからつくられたものであるということを感じております。

次の文章に入っていきます。現在の社会は健常者からの視点でつくられた環境ですが、誰にとっても暮らしやすい社会環境とは言えないと思います。しかし、健常者であっても子供と大人と高齢者であっても暮らしやすさは個別に違います。ここのところなんですけど、小さなお子さんがいらっしやると、大人の階段の高さは違って当たり前ですよ。なので、子供にも暮らしやすい階段、段差はそれぞれだと思うので、その時点でも考えられると思っています。やはり、暮らしやすさは個別に違うと思っています。

最近よくニュース、テレビ、新聞等でも取りあげられています共生社会という言葉で始めさせていただきますが、その共生社会の実現は全ての人が同じ社会環境を共有した上で、生活の充実感が得られることだと私は考えております。共生社会、先ほど申し上げましたお子様、健常者の方、高齢者の方、もちろん障害者も含めて社会環境が共有できた上で、そして心から充実感が、生活の充実感が得られることが大切だと思います。

私は、お仕事、今、東京都内で勤務しておりますけれども、やはりさまざまな面でまだまだこれから改善する必要もあると思いますし、それに関わっていきたくと思っていますが、最後には、この東京都に生まれ育って良かった、ここに暮らして良かったと思える充実感が最後には必要じゃないかと考えております。

そこから3つ切り口を通して考えたいと思っています。私が考える精神障害者にとっての共生社会、誰にでも暮らしやすい社会を、以下の3つの点からお話したいと思っています。

まず1番目に、ストレスに強い社会とは、脆くて弱い社会ではないかと思っています。ストレスに強い弱いというところで切り口を考えますと、例えば精神的にストレスがかかる場面というのはたくさんあると思うのですよね。働く、学校に行くということ自体もストレスがかかったりとかしますし、何か大きな災害があった時に対する環境の変化に対するストレス、これはもう健常者でも障害者でも等しいと思いますけれども、その中で、精神障害者が感じる大きなストレスというところで考えるんですけれども、よく精神障害の場合は、ストレス脆弱性、脆くて弱い性があるというところで尺度があると思うんですけれども、実際に精神障害者、ストレスに弱くて脆いのかというところで、すごく私は疑問に感じます。

では、ストレスをはねのける人たちのほうが強いのかというと、それは私の中では不思議だなと思うところがあって、私自身も精神障害を持っておりまして、このストレスに脆くて弱いのかな、生活していて思うんですけど、私、この言葉についてちょっと差別的表現に感じると思います。ストレスに対して敏感であったりとか、その変化に対応しようとする反応を、脆くて弱いという表現で捉えるのは、やはり健常者、そういう変化に対応しない方たちが、そういう見方をしているのかなと思っています。なので、真のストレス脆弱性というのは、ストレスに対して感じにくい方のほうがストレスに本当は脆くて弱いのではないかなというところがあります。が1つ目です。

2つ目に、ちょっと精神障害に特有かもしれませんが、絶望から希望への転換は誰にでもあると思っています。精神障害特有の言葉かもしれませんが、リカバリーという言葉があります。私は、一度就職に失敗し、発病し、将来を絶望しました。確かに一般的に考えると精神障害になったということを固定化した障害ということで、もう将来はないと思った時期もありますが、

さまざまな支援者の方、もちろん医療関係者の方も含めて、私の人生の回復をお手伝いしていただいたことで、今、この場に立つことができいております。ふだんは相談支援事業所に月曜日から金曜日までの平日5日間、フルタイム、8時半から5時半まで勤務することができております。

私のリカバリーは、働きたいということが前提となっております。その中で日々の生活、暮らしをしております。もちろん重い障害をお持ちの方は働くということではなく、もっとほかにリカバリーの目標があるとは思いますが、精神障害はもう治らない、将来がないということから、希望が持てる、リカバリーできるというところへ進めて、社会を変えていきたいと思っております。そして、それが実現していない社会は不思議だなと思っております。

3番目、最後なんですけれども、精神障害があっても町で暮らせる社会。今、確かに在宅、地域で暮らせている精神障害者の方いらっしゃいますけれども、日本の精神保健福祉、歴史的にもやはり精神科病院に長く入院されている方もいらっしゃいますし、精神科病院に入院してれば良いんじゃないかという風潮もまだ色濃く残っていると思います。なので、もうその時代は終わりにするべきだと思っています。地域で暮らせる、地域で暮らすのが当たり前の精神障害者の暮らしを実現するために、隔離収容の世代は、もう終わっていただきたいと思って、終焉という言葉を使いました。

最後の、この3つの切り口のほうからお話を進めさせていただきます。障害は人がつくっている。誰にでも暮らしやすい町も人がつくる。これは最初に申し上げましたように、同じ人として、障害があるなしに関係なく、誰にでも暮らしやすい町をつくるということの未来への可能性を信じていることだと思います。

障害は、人と人の間にある。これは心理的、物理的なことを言っております。

障害は、物にも心にもあると思います。

障害は、誰もが暮らしやすい優しい町づくりを実現するためのエッセンスを教えてくださいと思います。障害があるなしに関わらず、誰もが暮らしやすい町づくり、今年は東京オリンピック・パラリンピックの開催です。私は、大会のボランティアとして参加することを予定しています。

この機会、この令和2年の年に、この自立支援協議会のお場をお借りして、東京オリンピック・パラリンピックのことも、ちょっとタイムリーな話題なので、最後に述べさせていただきます。なんですけれども、私、スポーツにすごく興味関心、もちろん私はスポーツの経験がありまして、東京オリンピック・パラリンピックがあるからこそ、東京に来たいという思いがあって、5年前に出てきました。障害福祉サービスに関わって、今、東京の障害者、私も含めて障害者の方たちに関わる機会が日常的にあるんですけれども、この町をよくしようということは、健常者、障害者関わりなく、健常者の方たちが頑張るつくる社会でもなく、やはり障害者自身もこの町をよくしたい、もっと住み良い町にしたいという思い、考えがあれば、それをもっともっていろんな場面で発言していただきたいと思っております。それが、この町をつくる1つの原動力になるかなと思っています。なので、障害者だから発言をちょっとためらうというのではなくて、もっともって発信していく機会があって、もっともって聞いてもらえる機会があるというところを持ってほしいと思っております。ちょっと早いですが、これで私の発表の時間を終わらせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 内布さん、ありがとうございました。

内布さん、カヌーをされているんですね。今のお話で、ストレスをはねのけるのが本当に強いのかというお話がありましたけれども、何かストレスに鈍くなって感じなくなっていくというのはどうなんだろうというのを、ちょっと私もドキっとして聞きました。ありがとうございました。

続きまして、小倉さんです。小倉さんは、支援者の宮本さんと一緒にご登壇いただきます。よろしくお願ひします。

(小倉) 皆さん、こんにちは。私は東京都社会福祉協議会知的発達部会本人部会から来ました小倉千明です。私が言っていることがわかりづらいんですが、できたら聞いてください。

初めに、私の感じていること。なぜ、障害者は大人として見てもらえないのか。私が会議に出たら、この話は、大人の話なので、あなたはいいのよと言われ悔しかったです。だったら私は、この会議には要らないんじゃないかと思いました。

ほかには、私が歩いていると、近所の人が、えらいねとか、頑張っているねとか、言われますが、一般の人には言われたい言葉だと思います。ですから、二十歳を超えたら、障害者の人も大人です。皆さん理解して同じく接してください。

あと、去年のこの会議に出た時に私も意見を言いましたが、このことは関係ないかなと言われました。その時、私の意見も聞いてほしかったです。だから、私はまだまだ障害者の気持ちが理解できていないと思いました。私はとても残念と思いました。

皆さん、この機会にわかってください。確かに障害者の人は、いろいろな個性があります。でも、障害者の人たちも二十歳を超えたら大人です。

よく聞くんですけど、小倉さんはえらいね、頑張っているねとか、それは子供に対する言葉だと私は思いました。私はとても嫌だったです。私は、足も手も悪いけど大人です。難しい話はわかりませんが、障害者の人たちも二十歳を超えたら大人です。幼稚な言葉はやめてください。

確かに言えない障害者もいます。でも障害者の人も1人の大人として、見てもらいたいです。お願いします。

(宮本) 小倉さんと支援者の人が、この原稿をつくった後に話をして、次のページに書いてある、ほかに何かエピソードがありませんかと伺った時に、こんなエピソードを言っていただきましたので、私が読ませていただきます。

1人暮らしの時のことでした。区役所から封書など、本人宛ての内容にふりがなを振ってほしいです。難しく読めないし、理解できていなかったの、何か良い方法で伝えてほしいと思いました。

希望として、どこの駅にもエレベーターをつけてほしいです。以前に乗換駅でエレベーターがなく、「エスカレーターを」と駅員さんに言われましたが、前に転びそうになり、怖かった思いもありました。また、「エレベーターなら1つ先の駅に戻れば反対側のホームにはエレベーターがあります」とも言われました。というご意見でした。

これから小倉さんのことをご紹介しますが、私は東社協の知的発達部会の本人部会の支援委員会の委員長をしております。その関係で、小倉さんとは十数年来、勉強させていただいておりますので、ここに呼ばれたというふうに思っています。

小倉さんは今、谷在家福祉作業所、足立区にあります谷在家福祉作業所というところに通っていらっしゃいます。舎人ライナー、バスで通っているのね。舎人ライナーが通っているところです。そこの生活介護というサービスをご利用になっています。

何度かおじゃましましたけれど、今、仕事はアスクルという通販のやつ、マグネットでホワイトボードにつける袋のマグネットを入れるという重要な仕事をされておられました。そのほかに、おしぼりを畳む仕事だとか、純粋な石鹸を売っているというようなお仕事をされています。

それから、作業所の中では音楽クラブに入っておられまして、お祭りの時には音楽クラブの発表があって、今年は歌を歌ったんですけど、波の音が出るこういう楽器を使う係をされておられました。

小倉さんは、サービス管理責任者研修だとか、虐待研修の当事者のパネラーとして何度かこういう会場で自分のご意見を伝えるということの経験がある方です。

今は、お父さんとお2人で暮らしていらっしゃるんですけど、つい最近まで1人暮らしをされておられました。アパートで1人暮らしをされておられたんですけど、後でその時のお話を伺おうと思っていますが、その前はグループホームにも入っておられました。

お父さんと2人暮らしはどうですかと聞いた時に、アパート形式のグループホーム、1人ずつ部屋がセパレートされているような形のグループホームがあれば、またグループホームにも入っても良いかなとおっしゃっておられます。

谷在家におられる間に、ピアカウンセラーを目指そうと思って、ピアカウンセリングの講習会に足を運ばれていたり、それから何か就職できないかなというふうに活動されて、同じ法人の中の総合福祉センターの受付ならできそうかなと言って、自分で売り込みに行かれてうまくいかなかったんですね。というようなこととかをして、そうやって暮らしておられます。

今日、その表題のところにある知的発達障害部会本人部会の仲間が来ていただいて、非常に心強いというふうにおっしゃっておられました。小倉さんは、今日のお話を通じて、何を訴えたいかということ私と何回かお話をしたんですけどきつと今私が小倉さんを紹介したところまで聞かれると、重い障害があるのにえらいねとか、よく頑張っているねというふうな感想を持たれた方も中にはおられるかもしれない。そういうことは言われたくないんだということを言いたいということを、今日ここにきて言っておられます。小倉さんが、今生活をしてきているのは当たり前のことなんだ。その当たり前のことをみんなに伝わると良いなというふうにおっしゃっておられます。

それは、先ほどの野澤さん講演の中の11ページとか18ページにそういう思いみたいなことが、知的障害の人たちの感じ方みたいなのが書いてあるんですけど、ちょっと幾つか小倉さんに質問してみたいと思います。

子供扱いはされた経験が何回もあると、私はよく聞きましたけど、その時どう思いましたか。

(小倉) 毎回嫌な気持ち。何で大人は、確かに足も手も悪いから転びやすいとか、そういうのも確かにあるんだけど、私は大人と思っているのに、相手には見られないのかなど。危ない感じとか、ちょっと見ているとあれなのかなど、子供に思われちゃうのかなど思いました。

(宮本) 小倉さんはいつも何かあると、私がいけない、例えば今みたいに、歩き方が悪いから歩き方がおぼつかないから子供に見られたのかなどというふうに発言をされて、僕はそれは違いますよということを2人で言うんですけども、どうも本人部会をやっていると、外から何か知的障害の人が何か言われると、我慢する。言われても仕様がないうと行って我慢しちゃうとか、諦めちゃう、もう言われているのに慣れてるから諦めちゃうというようなことがあるんじゃないかなというふうに感じています。

ヘルパーさんも来ていますが、地下鉄でヘルパーさんと2人で階段が上れないからエレベーターありませんかと言われて、1個前の駅ならありますよという、とんでもないことを言われて、その時に言い返したりしましたか。

(小倉) しません。

(宮本) 引き返したんですか。

多分私たちだと、何だよと言うと思うんですけど、本当に小倉さんをはじめ、私の周りにいる知的障害の方は良い方で、我慢しちゃうんですね。

ちょっとその辺が私たち支援者として、もっと配慮しなければいけない、本当はどうなの、どう思っているのかということ、もう二度も三度も聞かなきゃいけないんじゃないかなというふうに感じています。

さっき外で打ち合わせをしている時に、小倉さんはこういうステージに立つことが嫌いじゃないんだというふうにおっしゃっておられました。何のために立つかということ、ほかの知的障害の方でステージに立つのが苦手な方はたくさんおられますけど、そのかわりに立つんだというお気持ちだったようです。

ちょっとその辺を。

(小倉) 私は東京大集会という、東京大集会に初めて1人で舞台の上で立って話して、最初は不安だったけど、その時も職員がいてくれて、小倉さん大丈夫だからと言われて、1回やってみ

たら、またその次も呼ばれて、何回もやっているうちに慣れてきたので、でも、1個不安なのは、今、私のしゃべっていることが皆さんに伝わっているかどうか。今もそうなんですけど、伝わっているのかな、伝わってないのかなと、いつも思っています。

でも、私はこういう場に出るのが非常に好きなので、不安なんだけど、今日初めてやる前に、場所を確認したんですね。私のイメージと全然違って、こんなところで言うのと思って、ちょっと不安になってきて、でも今やってみたら、気持ちが良いなと思っています。

(宮本) 今、東京大集会というふうにおっしゃられたんですけど、総合福祉法、支援法の前の総合福祉法になった時に、当事者の人たちが、私たち抜きに私たちのことを決めるなということ、日比谷の野外音楽堂なんか集まって、当事者の人たちが意見を言ったということが始まりのように記憶しているのですが、それが今も続いていて、今年は帝京平成大学の講堂でやったんですけど、小倉さん、その前は京王プラザホテルでやったんですけど、小倉さんはそういうところに出て、最初のころに発表されたということだと思います。

何か言い残したことがありますか。良いですか。

ではありがとうございます。

(拍手)

(司会) 小倉さん、宮本さん、ありがとうございます。

本当に最初、小倉さんは、この会場がイメージと違う、大丈夫かしらとおっしゃっていたんですけども、本当にお話して楽しかったと言っただけで、良かったと思います。

ご発表の中でもありましたけれども、こういう会議に出席されて、ちゃんと聞いてもらえなかったというお話だったんですが、こういう協議会とかも、そういう当事者の方の参画というのを進めるんだというふうに、私たちも言っていますけれども、本当の意味の参画というのは、どういうことなんだろうということをきちんと考えていかなければいけないというふうに思いました。ありがとうございます。

それでは、お三方目、道見さん、お願いいたします。

(道見) ただいま、ご紹介いただきました道見美由紀と申します。

私は手話で表現をいたします。それをまた通訳が読み取って声にしておりますので、よろしくをお願いいたします。

では、まず簡単に自己紹介から始めたいと思います。

私は、生まれてすぐ高熱を出しまして、発達の状態が遅れているということがありまして、3歳の時に耳が聞こえないということがわかりました。原因については不明でした。

ろう学校に通って、口話、手話など、コミュニケーション手段を学習いたしました。

小学部4年生の時に、自分が日常生活の中で、ぶつかったり転んだりすることが多くなって、医療機関を受診しました。その結果、視野が狭くなっているということがわかりました。高校を卒業するまでは、視野が狭くなっているということについて、自分としては問題を感じることはありませんでした。聴覚障害者として、生活をしてまいりました。

高校卒業後、就職をしまして、その後、結婚、出産を経験しました。年を重ねるにつれ、視力が低下をしていき、それについて悩みを感じるようになりました。そして、日常生活の中に不便さ、不自由さが起きるようになってきました。

15年前に、視覚障害のあるということが、眼科を受診した結果、告げられました。目の状況についてですが、夜は非常に見えにくい状態になります。視野も狭くなっていて、また視力も低下をしていて、色覚異常もあるということで、進行性の難病であるという状況です。いつかは全盲になるという不安を抱えて、非常にショックを受けて、毎日悩むような生活をしていました。

2年前に視野障害があるということを確認されました。

皆さんは、盲ろう者ということについて、何かご存じでしょうか。皆さん、盲ろう者という言葉を知ると、ヘレンケラーという方を想像する、思い浮かべる方が多いかと思っています。

盲ろう者とは、視覚、聴覚、その見え方、聞こえ方はさまざま、お1人、お1人違ってきます。耳と目に障害を合わせ持っている人のことを盲ろう者と言っております。全盲ろうの方、全盲難聴の方、弱視ろうの方、弱視難聴の方、大きく分けると4つに分かれるというふうに言われています。

私の場合は、弱視ろうになります。ろう者と盲ろう者の中間に位置する障害であるというふうに思っています。現在、夜は見えにくい状態ですし、視野も狭くなっており、視力も低下していますが、目は虫眼鏡のレンズをですね、右目の方は、はめたような見え方。そういうような状況で見えています。

ここからは、盲ろう者について、細かくお話をしていきたいと思っています。

是非、皆さんに理解していただきたいことがございます。

盲ろう者の日常生活は、なかなか健常者の方には想像ができない非常な不便さが伴います。その盲ろう者のベース、程度によって、本当にその状況はさまざま、お1人お1人状況が違ってきます。

私の場合の見えにくさは、こちらの資料のほう、皆様にお配りした資料のほうに書いてございますので、後でおうちに帰られてから、ゆっくりご覧になってください。

私の場合は、視野が狭いという状態ですが、視力はまだ残っていますので、何とか現在は1人で歩くことができます。

その場や状況によって、白杖を使ったり、白杖を使わなかったり、自分で判断して使用しています。通行量の多いようなところを歩く時、もしかしたら人にぶつかる可能性がありますので、白杖を持って歩くことがあります。白杖を持つという意味は、視覚障害があるということが、ほかの方から見てわかるというアイテムになっていますので、通行量の多いところでは白杖を使っています。

しかし、聴覚障害者である私は、白杖を持っていると、その白杖を見かけた方が、「お手伝いしましょうか」というような声かけをしてくださることがあるんですが、聴覚障害がありますので、それが気がつかないということがあります。それを無視しているわけではないんですが、聞こえないということで気がつかないことがあるんですね。声をかけられても、無視をしているというふうに誤解されるかもしれません。それで、声をかけても気がつかないので、諦めて帰ってしまう、去ってしまうという方もいらっしゃいます。

白杖を持っていて、声かけられたことに気がついた時は、「私は耳が聞こえません」というふうにお伝えをして、そう言われると、また声をかけた方がびっくりして、どうしたら良いのかわからなくて、戸惑ってしまう。そして、そのまま去ってってしまうという時もあります。私も、そういう様子を見かけると、困ったなというふうに思うんですが、がっかりするということ、悲しい気持ちにもなってしまいます。

私のコミュニケーション方法としては、ほとんど手話を使っています。ほかのコミュニケーション手段としては、筆談、身振りなどを使ったりしています。口話というのを使うんですが、ほかの人の方の口の形を読み取って、お話をするという方法です。時々、口話を読み間違いをする、通じるようで通じないことがあります。

例えばの文章ですが、「おかず、何」というような文章の場合、「おやつ、ない」というように、口の形がとても似ているんですね。それで、読み間違えたり、わからないことがあります。そういう場合は、手話がついていると文章がきちんと読み取れて、とてもありがたい。そういう意味で、手話は大切だと思います。筆談も同様です。

視力が低下をしていき、口話、口の形を読み取ることが難しくなってきました。それで、そのことについて悩み始めましたので、だんだん生きていく、頑張っていく気持ちがなくなってきたという悩みがありました。

盲ろう協会がある、そういう団体があるということは知っていました。でも、私自身は盲ろう

者ではない、盲ろうであるということに拒否感を持っていて、その団体があるということから逃げていました。それは、情報が足りなかったということも、1つの原因だったと思います。

3年前から、東京盲ろう者友の会、その支援を受けるようになりました。例えば、今まで生活面で非常に困っていたこと、その困っていた部分を盲ろう者向けの通訳・介助者の派遣を受けるようになって変わっていきました。そのサービスを受けて、それまで諦めていたことが、通訳・介助者と外出できるようになって、行動面が本当に幅広くなって、うれしく感じるようになって、通訳・介助を受けることに感謝をするようになりました。

盲ろう者のコミュニケーション手段としては、音声、対面手話、弱視手話ですね。それから触手話、点字、手書き文字、それから指点字、さまざまなコミュニケーション手段があります。

私が1番驚いたことは、点字の機械ですね。名前は「ブレイルセンス」、その中の「ポラリス」という機種があるんですが、そういう機械です。例えばメールの送受信、LINEの送受信もできます。その機械、「ブレイルセンス」という機械がありますので、さまざまな情報をそこから取ることができますので、とても良いな、便利だなと思っています。

最後に、皆さんにお伝えしたいことがあります。社会には、盲ろう者がいるということを知っていただきたいと思っています。聞こえにくい、見えにくい、それでも生活をしている盲ろう者が近くにいる、そういうことを常にいるということを知りたい、是非、自分の身近に盲ろう者がいるかもしれないということを知りたいと思っています。

物や形に関するハード面のバリアフリーは進んでいますけれども、心のバリアフリーは、まだまだ遅れているというふうに思います。いろんな面で苦労がある、不自由や不便を抱えて困っている、それでも生活をしている、そういう盲ろう者がいるということを知っていただきたいと思っています。

もし、外に出た時に盲ろうの方を見かけたら、是非声をかけていただいて、身振りや手振り、そして手話など、いろんなコミュニケーションを使って、手書きでも結構です。そういうコミュニケーションを使って、是非対応していただきたいと思っています。話す時間、会話の時間は、ちょっとほかの方よりも時間はかかるかもしれませんが、是非対応していただきたいと思っています。

また、日常生活の中で困っている。もし、そういう方を見かけたら、お知り合いなんかがいらっしゃったら、東京盲ろう者友の会、そういう団体があるということをご紹介いただく、あるいはそういう団体に電話をかけていただきたいと思っています。

盲ろう者に気軽に声をかけられる、手を持って誘導していただける、そういう当たり前の社会になってほしいというふうに思っています。

以上です。

(拍手)

(岩本) 道見さん、ありがとうございました。

近くに盲ろう者がいるかもしれないという、そのかもしれないというのを私たちが常に思っておくというか、自分で完結しないで、かもしれないと思っておくということが、とても何か大きなヒントのように思いました。

今、道見さんは立ってお話をしていただいたんですけど、このパネルディスカッションの打ち合わせの時に、座って話すかどうかというお話をしていたんですけど、私も立って話すと、ちょっと緊張するんじゃないかとか、座ったほうが落ちつけるんじゃないかということで、どうぞ座ってというお話をしたんですね。ただ、道見さんは手話を使われるので、やっぱり座っていると手話が見えない、それに手話がテーブルに当たってしまうということで、手が当たってしまうということで、「立っても良いですか」というふうにおっしゃって、ここでもですね、私も常に自分の目線というか、自分の物差しでものを見ているんだなというようなことも気づいた時でした。

お三方のお話を聞いて、皆さんもいろんなことを思うことがあったのではないかと思います。まず、ここで一旦休憩を挟んで、それから、野澤さんにもご登壇いただいて、またお三方からいろいろお話も聞かせていただきたいと思いますと思っています。

では、発表ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 皆様ありがとうございました。

それでは、ここで20分間の休憩といたします。若干早く進んでいますけれども、こちらの時計で15時55分にパネルディスカッションのほうを再開したいと思います。よろしく願いいたします。

(休憩)

(司会) それでは、第2部、パネルディスカッションを再開いたします。

進行は引き続き、岩本会長にお願いをいたします。

(岩本) では、パネルディスカッションの第2部ということで、ここからは野澤さんにもご登壇いただいて、一緒に進めてまいりたいと思っています。

今、お三方にお話しいただいたんですけれども、通常こういったパネルディスカッションとか、シンポジウムは、すごく時間が押してしまって、足りなくなってしまうことがあるんですけれども、今日は本当に時間どおりに進めていただいて、その分、ちょっとなかなか言い足りなかったこともあるのではないかなと思いますので、最初はちょっと幾つか、もう一度ですね、私のほうからお三方に質問させていただいて、そこから進めていきたいと思っています。

まず、それぞれ障害は違うんだけれども、共通する部分もいろいろあったかなと思いますので、それぞれほかの方の発言内容を聞いて、ご感想を聞きたいなと思っていますが、よろしいでしょうか。

内布さんから良いですか。お願いします。

(内布) 内布です。私以外の方の小倉さんと道見さんのお話伺って、感想レベルなんですけれども、小倉さんの話を伺って思った感想なんですけども、やはり1人の人として、1人の社会人、成人として見てほしいというところは、すごく響きました。精神障害者当事者も患者さんに対して、子供扱いしているようなところとかあると思うんで、ちょっとそここのところ共通点があって、すごく響きました。

道見さんのお話を伺って感じたことなんですけど、やはり障害者という大きな枠はあると思うんですけど、やはり障害の多様性を認めるということで、やはり障害種別の特徴とか、しっかり見てほしいと思います。やっぱり相手を見るということが大切だというふうに、私のほうは感じました。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。順番にお願いしたいと思います。

小倉さん、いかがですか。ほかの方の発表を聞いて。お願いいたします。

(小倉) ほかの方の意見も、私も病気は違うんだけど、確かに、いろんな障害者もいて、障害をわかってもらうため、自分なりに頑張る時もあったり、頑張れない時も、良いなという時もあったりも良いのかなって、そういうことも知ってもらいたいなと思いました。

どちらの方にしても、私は、谷在家でも、目がちょっと見えなかったり、やっぱり同じ障害を持っている人がいて、その人も白杖を持ったりして歩いているけど、そういう人もあったり、目も見えない人も、いろんな障害者の人もいるのを皆さんも知っててもらいたいです。

以上です。

(岩本) 宮本さんはよろしいですか。

では、道見さんも、お二方のお話を聞いて。

(道見) 私も、お二方のお話を伺って、私とは障害は違いますが、いろいろ同じ共通する思い

があります。

例えば、ストレスについてです。自分の障害と向き合わなければならないということに悩んで、非常に精神的にも波があり、ストレスを持ちます。

それと、もう一点。小倉さんの話ですけれども、頑張っってねというような言葉、大変ですねとかいう、そういった言葉。家族も含めて、よく言われます。世間の人から言われます。でも、それは本当に不思議ですよ。私は正直、毎日、毎日、一生懸命頑張っっています。大変な面もあります。でも、そういったことに向き合っって頑張っっているけれども、わざわざ、更には頑張っってねと言われると、私はもう十分頑張っっているのにというふうに思っっています。精神的にも、それは非常に、私だけではなく、家族も、それは非常に嫌な思っいをしてしまっいます。何も考えずに頑張っってねと皆さんがおっしゃること、それはちょっご遠慮いたっきたいかなというふうに思っっています。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。

先ほど、小倉さんもいろんなことをやっっているんですけども、それは小倉さんにとっては、本当にごく当たり前のことなっただけ、「頑張っっているね」、「偉いね」と言われることの違和感とお話さされていまっしたよね。

本当に、日々その人の生活を普通に暮らしているんですけど、何か障害のある方に対して私たちが、そういう言葉を自然と言っってしまうというところが、すごく不思議だなというふうなご意見だっったと思っいます。

今ちょうど休憩中に、第1部でちょっと言っ足りなかつたことはありますかというふうにお話を聞いたんですけども、小倉さんのほうからも、少し追加のお話と、あと、1人暮らしの時のエピソードも、もしあつたらお聞かせいたっきたいなと思っうんですけども、お願っいします。

(小倉) 私の1人暮らしの時は、何か新聞屋さんが来て、しつこく新聞を頼んでくださっいとか言われて、何度も何度も来られて、それがちょっご困ったなと思っいました。

あと、ここにも書いってあつたんですけど、郵便物が難しくて、いちいち谷在家の職員とかに相談したりして、そういうのが困りました。

あと、私、歩き方がおかしいの、皆さんわかりますよね。私が仕事の行き帰りに、小学生とか、中学生とかと会うと、ばかにされるんですよ。私の歩き方を見て。それは非常に困るので、もし、今日来ている人たちの中に、子供とかいるご家庭があつたら、ちょっごでも子供に伝えてほしいかなと。足も手も悪い人は、わざと歩いっているわけじゃないんだよっって。面白がっって笑う人じゃなくて、足も手も悪い人とか、車椅子に乗っている人とかは、そういう個性というのかな。個性を持っって、ちゃんと生きていっるんだから、それを伝えてもらいたっいかなっって思っって、この場をかりて言っいました。もしよければお願っいします。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。

子供たちにどう伝えていくかという、その伝える責任というのが、特に、今日話を聞いてくださっった皆様が持ち帰っていたっきたいということだと思っいます。

ありがとうございます。

それから内布さんは、ちょっご今日はほかの方のお話で、ピアサポーターのピアサポートの話が出てきたと思っうんですが、ピアサポーターとして活躍されていって、そういった立場からも、少しご発言があるということでしたので、お願っいいたします。

(内布) ありがとうございます。私、所属はピアサポート専門員研修機構なんですけども、ピアサポーターのところで少し活動さっせていただいっておりますので、少しお時間いたっきまして、ありがとうございます。

精神障害者の当事者も、今、基調講演にもありまっしたように、就職しても、なかなか定着しな

いという、離職率が高いというところも、特徴としてはあるかとは思いますが、なかなかですね、精神障害の方がピアサポートを受けたい、当事者に会いたいと思った時に、やはりなかなか会う機会がないと思うんですね。なので、やはりいろんな領域、福祉であったり、医療であったり、一般的な企業であるところに、精神障害当事者も含めて、ピアサポーターが必要なんだと思っています。

具体的には、私は、その広げる活動としてピアサポート専門員の研修を行わせていただいたり、あと精神保健福祉センターで、事例検討として当事者のご意見を述べさせていただいたり、あと地域移行の体制整備事業で、ピアサポーターとして関わらせていただいているんですけども、具体的に、その中で私たちの精神障害者が、少しずつ活躍の場が広がっていると思っています。やはり、そのことも含めて、当事者、ピアサポーターの必要性はかなり高いと思っております。

先ほど、小倉さんのお話と、あと道見さんのお話を伺っていて、やはり当事者の経験を伝える時には、やはりある程度の研修等を受けて、適切に自分の経験を差し出すというところは、少し磨いていく必要があるかなと思いますけれども、やはり当事者の経験を伝えることが大切だと思ひまして、ちょっと言いづらいところなんですけれども、東京都も自立支援協議会で、今後ピアサポーターの養成や、ひいては雇用のお話を続けていただきたいという、ちょっと願いも含めて、お話しさせていただきました。ありがとうございます。

(岩本) ありがとうございます。よろしいですか。

もっと、多分お話したいこともたくさんあると思うんですけども、これまでのお話を聞いて、ここで野澤さんに、今までの話のコメントをいただければと思います。お願いします。

(野澤) フロアから、3人の方のお話を聞いて、何かとっても興味深いというか、いろんなことを私も考えさせられました。

ちょっと1人ずつ感じたことをお話しさせていただくと、内布さんの話の中に、ストレスに強い社会は、脆くて弱い社会なんじゃないかって、本当に核心を突くようなことをおっしゃっていたなど。

私が働いていた会社もそうですけれども、今どこの会社、どの組織も、新しく入ってきた方がメンタルをやられて、離職したり、休職したりとすごく多いんですね。どの会社も、それが今悩みなんです。だから、採用する時に第一の条件は、メンタルが強い人としてみたいなことなんです。

そうすると、ストレスに強い、メンタルに強い人ばかり求めていくと、弱い人が増々排除されていくということ招くわけですよ。メンタルが強いとされている人も、本当に強いのかどうなのかということなんです。強い時はあるかもしれないけれども、ずっとその方が強いのかどうなのかということです。

何といいますかね、弱さを認められる社会。もちろん頑張れる時は頑張るわけですけども、頑張れない時にまでも、強さを求められる社会って、本当に何か危ういなって思うんですね。

いろんな能力、いろんなセンスを持っている人たちがいる組織というのも、やっぱりレジリエンスといいますかね、いろんな柔軟性に富んで、いろんな発想が。だって、イノベーションなんていうのは、違うもの同士の価値観のぶつかり合いの中しか生まれませんからね。同じ人同士の均一な社会なんか、何も面白いものは生まれませんよ。そういうものをどんどん、どんどん、何というか、排除していく。

これ何なのかなという、元はやっぱり新自由主義経済の目先の利益を求められるというところに、やっぱり大きな原因があって、利益を上げられないと、経営者が放逐されると。だから、すぐに役立つものを求めていくと。今、福祉の助成金だとか、補助金だとか、みんなそうですよね。見ると、この事業で何が得られるのか書きなさいとかね、そんなばっかで、私もそういうのを申請したことがあるんですけど、わざと、すぐに役立つものは、すぐに役に立たなくなりますと書いてね、嫌みを書くんですけどね、それから一向に何の問い合わせもないということが多

いんですけども。何かそういう元の文化のところに、目を向けて行く。そういうのを1番敏感に感じていらっしゃる、こういう内布さんのような存在って、本当に貴重だと思うんですよ。こういう方たちの価値観というものをやっぱりもっともっと我々、社会の中に生かしていかなきゃいけないんじゃないかなということを感じさせられました。

それと小倉さん、新聞の勧誘員に何かしつこくって。もう無視してやってください、そんなもの。読まなくて良いんですよ。本当に。

私、上智大学の新聞学科で授業を持っていますけどね、上智大の新聞学科なのにですよ、新聞読んでいる子って、誰も手をあげないですからね。テレビすら見ない、最近の大学生はね。さんまは知らないけど、ヒカキン知っているという子がどんどん増えている。つまりY o u T u b eですよ。

どんどん世の中変わっている。それについて来れない産業、会社ということですよ。障害のある方をしつこく追いかけまわして、新聞取らせなければ成り立たない会社、お年寄りをだまさなければやっていけない日本郵政、もう情けないですよ。本当にね。誰がこんな社会にしちゃったんだっていう感じなんですよね。

それと、小倉さんの話の中で子供扱いするなって、本当に私そのとおりでと思いますね。うちの子なんか、言葉は全くしゃべらないですけども、33歳ですけども。よく1歳程度の知能とかね、2歳程度の知能という尺度がありますけどね、私本当に失礼な言い方だと思って。IQ検査の評価尺度だけで、人間を図るような発想の貧困さ。こんなものを何か、いつまでも障害のある方に押しつけるなんて、本当に私は腹立たしいなと思っているんです。

やっぱりうちの子を見ていても、33年間生きてきた中でのものって、やっぱりありますよ。私見ていて。豊かなものがあるし、いろんな人との出会いがあったり、別れがあったり、そこでときめくような、でも傷つけられるようなこともあって、いろんなものが彼の中で醸成されてきてね、いろんなものが、その中で豊かな世界を内面世界をつくっていくのを感じますよ。やっぱり彼なんかはね、尊厳を傷つけられるのが1番怒りますね。本当に人にとっての尊厳みたいなものを大事にしていけないといけないなって思うんです。

言葉というのはね、私は言葉によって人に話を聞いて、それを自分の中で落とし込んで、文字によって社会に伝える仕事を36年やってきましたけれども、やればやるほどですね、言葉では実態を捉えられないなという思いが強くなってきているんです。それだけ、その実態の深さとか、濃さとか、この豊かさというものは、言葉ではほんの一すくいしか取れないなと思うんです。もともと人間の存在というのは、そういうものだと思うんです。曖昧で非常に奥行きがあって、複雑で、つかみどころのない、だから面白いんじゃないですかね。言葉によって切り取った瞬間に、もっともっと豊かなものを私たちはそぎ落としてきていると思うんです。なので、言葉では捉えられないものをもっと大事に見ていかなきゃいけないんじゃないかなって思うんです。

さっきの駅員さん、エレベーターないですかと言ったら、1つ前の駅の反対側のホームにあるよ。私この駅員さんの頭の中、開いてね、思考回路がどうなっているのか見てみたいですね。衝撃を受けましたね。この人ね。何なんだろうなと思いますね、この人ね。エレベーターを何に使うのかという、その先の発想が全くないのか、わかっているけど排除しているのか、どっちかだと思いますけれども、いずれにしても、この方も、でも冷静に考えてみると、最初から障害者を排除しようと思って生まれてきたわけじゃないと思うんです。障害者を否定し、排除する社会の価値観に染められてきた、長年かけて。そこをやっぱり我々は見ていかなきゃいけないと思うんですよ。

相模原事件は大変な事件ですけども、でも、その裾野のほうには、こういう考えの人はいっぱいいるはずなんです。それをどうやって変えていくのかと、いろいろ考えるんですけども、1つは差別解消法のような法律とかね、いろんなことがありますけれど、やっぱり1番説得力があるのは、当事者が町に出ていくということに尽きるな、それだなと思うんですよ。

小倉さんはね、こういう悔しい思いをしたりしながら、傷つけられたりしながらも、こうやって果敢に町に出て行って、自分の姿を多くの人の前に見せて、この駅員さんに、こういうことを投げかけられながらも、しっかりこういう場で、ちゃんとお返しをしていくみたいなね。本当に開拓者だと思うんですね。こういう方たちの涙や汗があるから、昔に比べれば、まだ少しはね、少しずつ、1ミリずつしか世の中よくなっていかないと思うんですね。だから、そういうプロセスというものを我々はやっぱり大事なものとして考えていきたいなって。1人では、やっぱり戦えないです。これはね。やっぱり小倉さんを支える仲間、あるいは愚痴を聞く仲間でも良いですし、そういう方たちと、もっともっと社会を開拓して行ってほしいなというふうに思うんですね。

それと道見さんも、確かに私も「もうろうをいきる」という映画がありましたよね。映画、私もちょっと関わって、パンフレットをつくる文章を書いたり、インタビューしたりとかをやったんです。あの映画を何度か見たんですけども、本当に盲ろうの方たちというのは多様なコミュニケーションですよ。

私は福島智さんしか知らなかったんで、ああいう指点字というものを盲ろうの人たちが使っているのかと思ったら、全然1人1人やっぱり違うんですね。目が見えなくなった順、耳が聞こえなくなった順番によっても違うし、年齢によっても違うしですね。また、コミュニケーションの手段が多様なだけではなくて、彼らの生活、実に多様なところですよ。信じられないような、佐渡で1人暮らしをしている盲ろうの女性がいたりしてね。この方の映像は、本当に凛として、たくましい、強いものを私感じて、感動したんですね。12月31日の夕方ですか、1年が終わって、1人で缶ビールをプシュッと開けるわけですよ。1年間、無事に終わったとゴクゴクゴクと飲むね、あの力強さね、人間の強さみたいなものをね、すごく感じさせられましたね。

それともう1つは、盲ろうのご夫婦もいたりなんかして、その方たちの生活の質素さというか、素朴さというか、幸せの素朴さ、素朴な幸せというのですかね。そういうものをすごく感じます。何かそれを見ていて、私、自分自身が恥ずかしくなったんですけど、何となくですね。

翻ってみると、今の社会というのは、もうネットで何でも知ることができるし、何でも見れるし、どこにでも行けるような気分ですよ。万能感ですよ。バーチャルな万能感で、多くの方思っていると思うんです。現実はそのではないというものと、大いなるギャップですよ。これが人間に幸せをもたらしていないんじゃないのかなと思った時に、盲ろうの方たちの非常に質素な、でも本当に満ち足りた、あの表情を見ている時にですね、人間の幸せって一体何なんだろうなみたいなことをね、そこに私は感じているんです。

そういう方たちの存在というのは、今の我々の本当に何もかも行き詰まったような、この時代、社会の中で、本当に大きなヒントを私たちに与えてくれていると思っっているんです。そういうものを真剣に、本気で、私たち受けとめて、研究していかないといけないんじゃないかなって、改めて今日思いました。

(岩本) ありがとうございます。

皆様もいろいろなことにお感じになっていらっしゃるかと思えます。ここで、時間限られているんですけども、フロアでお聞きになっている方々から、ご意見といいますか、ご感想を是非ご発言いただきたいと思っております。

ちょっと何人の方が手をあげてくださるかかわからないんですけども、お1人、2、3分ぐらいを目途に、ご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。せつかくの機会ですので、是非聞いていらっしゃる方々から、何かご発言いただきたいと思えます。

(質問者A) 内布さんにお聞きしたいです。

ピアサポートが、もっと必要ということなのですが、行政でもピアサポートというのを入っていて、ピアカウンセリングとかをやっていたりするんですけども、その基準がとても多様で、また、そのピアカウンセリング等に関わる当事者に必要とされるスキルや、その内容についても、非常に多様な実態があると思えます。

内布さんとしては、やっぱりここだけというふうな、ピアサポートが成立して、ここだけは外せないという要件は何だろうというふうにお考えか、ちょっとお聞きしたいです。

(内布) ありがとうございます。

ピアサポーター。いろんな意味で、ピアサポートに関わる人が持っていただきたいと思うところですけど、やはりそうですね、強いて言えば、強いて言えばなんですけども、やはり、人間誰しも希望の感覚ってあると思うんですよね。自分こういうふうに生きたいんだとか、こういう暮らししたいんだという、希望の感覚があると思いますよね。いろんな手法はあると思います。ピアカウンセリングとか、精神の領域でも、またいろんな手法とか、考え方とかあると思うんですけど、やはりピアと仲間同士の支え合いの中で、希望が持てるサポートができるのが基本だと思っております。細かいところはちょっとお話しする時間がないので申し訳ないんですけども、やはり希望の感覚が持てるピアサポートが基本だと思っております。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。よろしいでしょうか。

では、ご質問でも、ご意見、ご感想でも結構ですので、ほかの方。先ほどちょっと手があがっていたように思うんですが、いかがでしょうか。

はい。じゃあ、お願いします。

(質問者B) 私は大田区で視覚障害者の当事者委員として、自立支援協議会に参加させていただいております〇〇といいます。今日は、大変良いお話を聞きまして、ありがとうございます。

1つ提案としては、道見さんのほうの単独歩行をしている時に、盲ろうの方々に、白杖ではなく、例えば赤と白とか、白と黄色とか何かを持っていると、盲ろう者ですよというような、わかるようなものを福島智さんたちと考えてほしいなどは思いました。

今後、高齢者が増えてくると、私は全盲ですが、弱視難聴の方から始まって、全盲ろうの人、皆さん暮らしに困ると思いますので、そういう伝え方。

それと3人に共通しているのは、やはり福祉関係の方でも、私は良いとも思いますけど、かなり、先ほど野澤さんが言ったような人間の尊厳のことを考えますと難しいんですが、各障害特性によって、正しい理解啓発をもう少し進めなきゃいけないなどは考えています。

それから、個人個人の障害の特性の大きさが違いますので、これは難しい問題ですけど、ただ暮らしのスピード感、その人に好ましい時間帯に合わせてあげた、相互扶助を考えていただきたいと思います。

もう1つ言えば、東京都の自立支援協議会も、そろそろ、だんだん、みんな入ってきたのかなと思いました。今までは、ただ、ただ、形ばっかで、全然だめな組織だなと考えておりました。これは苦情の1つです。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。ご意見ということでよろしいですか。

何か、道見さん、今のご発言にコメントありますか。

(道見) お話をいただきありがとうございます。

盲ろう者の白杖については、私ども友の会の中で、時々話し合ったりすることがございます。今、案としてはあるんですが、1人1人、白杖、赤白交互になった白杖を持つ人もいらっしゃいます。それは盲ろう者をアピールしたいという考えの基に、赤白の白杖を持っていらっしゃるわけです。

私個人としては、ちょっとまだ戸惑いがあるというか、違和感があるというか、まだ盲ろうであるということをはっきりあらかず部分で、良い面もありますけれど、自分を守るという意味では、盲ろうであるということアピールするのは難しい、危険があるのではないかというふうにご考えて、今は白杖を使っています。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。

では、あと、お1人、お2人、お話聞けるとお思いますので、是非皆さんの発言も聞かせていただければと思います。いかがでしょうか。

(質問者C) ありがとうございます。感想です。

今、白杖のことを発言された〇〇さんと同じ大田区の自立支援協議会が立ちあがったところから関わりまして、私は知的障害者の自閉症の母親なんですけれども、そのことを啓発していきたいなという思いで、防災のことでどうだろうということで、ヘルプカードをつくるというところからずっときました。それは、ある意味地域の皆さんに知っていただく。今、盲ろうの方の白杖のお話もありましたけれども、同じように、これをつけたら危ないんじゃないかしらというような当事者であったり、周りの関係者のコメントもあったりして、やはり、そういう思いがおありなんだなというふうに思いました。

先ほど、〇〇さんもおっしゃいましたけれども、大田より、たしか1年ぐらい遅れて、東京のこちらの自立支援協議会が組織されたんだと思っています。なので、交流会やセミナーも、ほとんど、全部じゃないんですけど、毎回興味を持って参加はしてきていたんですけども、今回、当事者の皆さんが参加されたということは、やはりすごい進歩だなというふうに思いつつ、逆にそういうことを障害福祉関係じゃない人たちに、どのようにアピールしていけるかが、この自立支援協議会、都の自立支援協議会。東京都って格別じゃないですか。大田区も七十何万人という人口のいる中で、1つの自立支援協議会で、なかなか、本当、現場に届き切れていないなという思いはあるんですけども、やはりそこら辺を励ましていただけるような、都の取組というところに期待したいなというふうに思っています。何か雰囲気。

オリ・パラの勢いばかりじゃなくて、本当に、こちらが現場を知っているという意味合いでも、地域の皆さんに知っていただけるような機会づくりみたいのところへ、発展していただければなというふうに思っています。

以上です。

(岩本) ありがとうございます。協議会に対する今後の課題というか、そういったことかなというふうに思っています。

本当に東京都って、すごく大きくて、この協議会の運営どうしていこうかというのを私会長になって2期目なんですけれども、当初すごく模索の時、やはりそれぞれの自治体の協議会が頑張っている中で、どうやって情報の共有であったりとか、発信であったりとか、各地域の協議会をバックアップするような、そういう力というか、体力が持てたら良いなというふうに思いつつですね、なかなかやはり、どうしていったら良いだろうかと、個々の部分では悩んでいるところもありますので、こういう機会に本当にいろいろご意見をいただいて、東京都としてやるべきことというのを一緒に考えていただくと良いなと思ってお聞きしました。ありがとうございます。

あと、よろしいですか、皆さん。これだけは言っておきたいというのがもしあったら、大丈夫でしょうか。

ありがとうございます。

きっといろいろ発言はされなくても、皆さんいろいろ、それぞれ思っていらっしゃることがおありかなというふうに思います。もうすぐ時間になりますので、最後にですね、登壇いただいたパネリストの方に一言ずつ、今日の感想でも結構ですので、一言コメントいただきたいと思ます。内布さんから良いですか。

(内布) ありがとうございます。一言感想ということなんですけれども、やはり当事者の声が響いていく社会、その後には、障害者という言葉自体もなくなっていくのではないかなと思って、そのきっかけになればという、今日のセミナーであってほしいと思いました。

以上です。

(拍手)

(小倉) 今日は、ありがとうございます。

このことは、もう一度言うておきます。二十歳を越えたら、みんな障害者も大人です。その言葉は、頭の片隅に置いていただけたらうれしいです。

今日は、ありがとうございます。

(拍手)

(道見) 本日、この場に立たせていただきまして、皆さんの前でお話しするような、こういった経験は私は初めてでした。皆さんに、お伝えしたいことをまとめるのが非常に大変でしたけれど、また頑張って一生懸命お話しすることができました。

盲ろう者を理解していただける方が1人でも増えていただければと思います。

また、お2人のお話を伺って気づいたことは、障害者も、健常者も、共に暮らしていける、この社会というもの、そういう社会に変わっていくのが1番理想、良いなと思います。

本日はありがとうございます。

(拍手)

(岩本) ありがとうございます。

先ほど野澤さん、コメントをいろいろいただいたんですけども、最後にもう一度、締めといいますか、コメントをいただきたいと思います。

本当に今、地域共生社会という言葉が言われている一方で、なかなか、じゃあ我々のその社会が、その土台がちゃんとできているかというところが、すごく心もとないことが多くて、そういったご発言もいただいたと思いますので、その点も締めくくりで、コメントをお願いします。

(野澤) 私はずっと新聞記者をやってきましたね、目の前にいろんな目まぐるしい出来事が起きている、それを取材したり、分析したりして、記事に書いてきた人間なんですけど、いつも考えてみると根っこには、やっぱり息子のことがあったと思うんですね。言葉のない重度の障害を持った、その彼の生活というものをやっぱり自分の中にあって、そこを通して、いろんな物事を見ている。仕事をやめてから、本当に何か、軸足を本当にそちらのほうに移して、いろんなものを感じるようになりました。

今年の正月ですね、ちょっと時間が少しだけできたので、お酒飲みながら、本をたっぷり読みましたので、1つはね、資本主義はもう終わっているという本なんです。経済の本なんですけれども、資本主義と国民国家というのが、もう終わりなんだというような本で、つまり資本主義というのは、フロンティアがあって成り立つわけですよ。植民地があり、そこからエネルギーや労働力や土地を収集しながら、富をあげてきたみたいですね。ところが世界中見ても、そういうフロンティアなくなってきたよね。次、アメリカがやったのは、金融工学によって、架空のフロンティアをつくりやってきましたんだけど、それはそういう幻が消えた。もう何もなくなってきた。もう行き詰まっているということですね。

もう1つ、国民国家とは何かというと、今起きている問題の環境問題だとか、テロだとか、グローバルゼーションというのは、1つの国ではコントロールできないんですよ。だから、そういうものを対処するためには、今の国民国家では小さ過ぎる。個々の人々の生活や幸せを考える時には、国民国家では大き過ぎるということで、ここを何とかしなきゃいけないんじゃないかということです。

もう1つは、近代政治史に関する本で、日本ではずっとやっぱり明治維新史観、司馬遼太郎史観に縛られているというわけですよ。江戸が終わって明治から始まるものを昭和になっても、戦後もずっと坂の上の雲を目指しているわけですよ、我々ね。欧米の豊かなものに追いつき、追い越せで、日本人というのは坂の上の雲を目指して、ずっとひた走っていた。どれだけ走ったって、その雲はつかめないわけですよ。バブルが崩壊しても、相変わらず、竜馬や西郷隆盛を求めてきたわけですよ。でも坂本竜馬なんて、同時代ではあまり名も知られていない人で、あれは司馬遼太郎が昭和30年代ですかね、「竜馬がゆく」という本を書いて、初めて日本全体のヒーロ

一になった人物で、もっともっと我々の社会というのは、江戸時代以前に、もっと豊かなものがあつたはずだというふうなことをですね、もう一度レビューしなきゃいけないんじゃないかみたいな本なんです。私、何かすごく刺激を受けて。

だから、どうするべきなのかって、そんなに簡単に答え見つかるものじゃないんですけども、そういう時にですね、誰もが、でもこういう危機は感じているわけですね。前の文化庁長官の青柳正規さんというのは、ローマ文明の研究者なんですけれども、彼と何度かお話しをさせていただく中で、彼が言っているのは、我々がこれから先、生き残ることができるかどうかは、心地良い停滞を引き受けられるかどうかだと言っているわけです。

その心地良い停滞というところに、私にはですね、私の長男のような重い障害をもった彼らのあの幸福感みたいなものとね、やっぱり響き合うんですよね。彼らが描く絵だとかですね、彼らが過ごしている時の何とも言えない、あのユーモアと寛容。何ていうんですかね。合理的なものや虚栄心だとか、金銭欲だとか、その合理性みたいなものはないけど、直観力とね、あのユーモアと寛容、ピースフルな心みたいなことを、やっぱり僕らもっと、尊重しなきゃいけないんじゃないかなって思うわけです。

戦後間もないころに、糸賀一雄さんという方が、「この子らを世の光に」って言葉を出したんです。あの言葉こそ、もう一度我々が噛みしめて、考えていかなきゃいけないんじゃないかなって思うわけです。

あの時代というのは、日本政府が優生思想を基に、優生保護法をつくり、障害者の強制不妊手術を推し進めてきた時代です。つまり障害者を要らないという、政府をあげて、障害者の存在を否定してきた嵐のど真ん中で、あの糸賀さんは、この子らこそ世の光なんだって叫んだわけですね。

あの何というか、先達の言葉というのをもう一度、私たちは現代こそで問いながら、これからのあまりにも行き詰まった、文明を超えるような、その先を見るような、思想というものをこの障害のある方たちから学んでいかなきゃいけないんじゃないかなって、そんなことを思っております。

今日、お話聞いた3人の皆さんからも、本当にいろんなヒントを、いただいたような気がするんですね。深い、深い、世界ですね、今日感じさせてもらったなって、改めて感謝したいなと思います。本当にありがとうございました。

(拍手)

(岩本) ありがとうございました。

今日全体のテーマが、障害のある人とつくる「みんなが暮らしやすい社会」ということだったんですけども、我々が今後どういう社会を目指すのかということのを改めて問うような時間だったかなと思います。

我々が生きる社会なので、障害とか、そういうことではなく、みんなで作っていく社会の有りようというのを、もう一度見直してみたいというようなことを思いました。

本当に今日、お三方のお話を聞いて、いろんな気づきとか発見とか、野澤さんもおっしゃっていましたが、あつたと思うんですけど、私も素朴に、もっともっといろいろな話を聞こうと思いました。

皆さんの近くにもですね、いろんな方が、思いを持っている方がいらっしゃると思いますので、改めてそういう方々の声を聞いて、一緒にどんな社会を目指そうかということを考えるような時間になったら良かったなと思います。

今日は、パネリストとして内布さん、小倉さん、宮本さん、道見さん、ありがとうございました。

そして基調講演から、コメンテーターとして、この第2部にも参加していただきました野澤さん、貴重なご意見本当にありがとうございました。

もう一度、登壇された皆様に拍手をお願いいたします。

(拍手)

(岩本) では、これで2部を終了させていただきます。

(司会) ご登壇をいただきました皆様、どうもありがとうございました。

いま一度ですね、盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

(司会) 本日もご来場いただきました皆様、長時間にわたりましてご清聴いただきありがとうございます。ありがとうございました。

以上をもちまして、令和元年度東京都自立支援協議会セミナー、第24回東京都障害者福祉交流セミナーを終了いたします。

皆様どうぞお気をつけてお帰りください。